



東京女子医科大学病院
病院案内

令和8年度版(2026～2027)

HOSPITAL GUIDE

TOKYO WOMEN'S MEDICAL UNIVERSITY HOSPITAL





ごあいさつ

病院長 **山口 淳一**

令和8年4月1日より、東京女子医科大学病院の病院長を拝命いたしました、山口淳一です。

東京女子医科大学病院は、創立以来「至誠と愛」の理念のもと、患者さん一人ひとりに真摯に向き合い、時代の要請に応えながら高度な医療を提供してまいりました。真心を尽くし、思いやりをもって人に接するという精神は、医療が高度化・複雑化する今日においてこそ、私たちが改めて大切にすべき原点であると考えています。

病気や治療に向き合うことは、患者さんやご家族にとって大きな不安を伴います。私たちの使命は、高度で専門的な医療を安全に提供することにとどまりません。丁寧でわかりやすい説明と温かな対応を通じて、患者さんの思いに寄り添い、納得と安心のもとで医療を受けていただける環境を整えることも、医療の質を支える大切な要素です。質の高い医療は、医師のみで実現できるものではありません。看護師、薬剤師、医療技術職、事務職をはじめ、多職種がそれぞれの専門性を発揮し、一つのチームとして患者さんを支えることが不可欠です。「この病院を受診してよかった」と感じていただける病院であり続けることを、すべての職員が共有する目標としてまいります。

また、大学病院として高度・専門医療や救急医療を担う一方、地域の医療機関の皆さまとの緊密な連携も、私たちの重要な使命です。専門的な検査や治療を必要とする患者さんを適切かつ迅速にお引き受けし、病状が安定した後は、かかりつけ医の先生方とともに地域で支えていく。こうした切れ目のない医療を通じて、地域の先生方から「大切な患者さんを安心して紹介できる病院」と信頼していただける存在を目指します。

私たちは今、「新生 東京女子医科大学病院」として新たな歩みを進めています。これまで培ってきた歴史と伝統を礎に、より安全で質の高い、そして人間味あふれる医療を追求し、患者さん、地域の医療機関、そして社会から信頼される病院であり続けたいと考えています。

皆さまの健康と安心を支えるため、職員一同、誠心誠意努めてまいりますので、今後とも、東京女子医科大学病院へのご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

新生 東京女子医科大学病院のミッション、ビジョン、バリュー

ミッション(Mission)～病院の使命～

社会から信頼される高度な医療を提供する大学病院として、人々の生命と健康を守ります。

ビジョン(Vision)～目指す病院像～

高水準の医療安全と最新の医療を追求し、患者さん一人ひとりに最善の医療を実践することを目指します。

バリュー(Value)～行動指針～

1. 人間中心(Human-Centered)
本学の理念である「至誠と愛」に立ち戻り、患者さんの利益を最優先に考え、安心・安全な医療を提供します。同時に、人材の育成を重視し、やりがいと誇りを持って働くことができる職場風土を醸成します。

2. 高潔(Integrity)
患者さんとご家族、職員、そして社会に対して高潔な志を貫きます。過去の過ちを決して忘れず、強いガバナンスと透明性のある運営を実現します。

3. 責任(Responsibility)
職員一人ひとりが考え、行動し、患者さんの生命と健康を守る責任を全うします。また、すべての職員がともに組織の改善に継続的に取り組みます。

4. 共創(Co-Creation)
職種を超えてすべての職員が一丸となり、患者さんとご家族とともに、最善の医療を実践することを目指します。

5. 革新(Innovation)
新しいアイデアやアプローチに対して開かれた姿勢を持ち続けます。最新の医療技術とケアを追求し、常に医療の質の向上を目指します。

当院の機能と役割

1. 当院は急性期医療の病院です

当院は、診療所及び病院などからの紹介で、大学病院の入院治療が必要な方を積極的に受け入れる病院です。

2. 病状安定後は退院・転院をお願いしています

高度急性期の治療を必要としている方に適切に対応するために、当院での高度急性期治療が終わった患者さんは、退院して在宅や紹介元や地域の病院への転院をしていただきます。

3. 地域の医療機関と連携を図っています

当院は、地域の病院や診療所、かかりつけの先生方と密接な医療連携を結び、切れ目のない医療の提供を実践しております。退院や転院については、当院の医師や看護師および医療連携・入退院支援部にご相談ください。

東京女子医科大学病院 患者さんの権利と責務

患者さんの権利

1. 良質な医療を受ける権利
身体的、言語的、文化的違いに関わらず、平等に良質な医療を受けることができます。

2. 選択の自由の権利
納得して治療をうけられるよう、他施設の医師に意見(セカンドオピニオン)を求めることができます。

3. 自己決定の権利
十分な説明と情報提供を受けたうえで、検査、治療、手術などを自らの意思で決めることができます。

4. 情報に対する権利
病状、検査、治療、手術、見通しなどについて、理解しやすい言葉や方法で、納得できるまで説明を受けることができます。
また、ご自身の診療記録の情報開示を求めることができます。

5. 守秘義務に対する権利
プライバシーは尊重され、個人情報は保護されます。

6. 健康教育を受ける権利
疾病の予防および早期発見などの健康教育を受けることができます。

7. 尊厳に対する権利
だれもが、一人の人間として、いかなる状況においてもその人格や価値観が尊重されます。

8. 宗教的支援に対する権利
精神的および宗教的な慣習について配慮を受けることができます。

患者さんの責務

1. 情報の提供
良質な医療を実現するために、ご自身の健康に関する情報をできる限り正確にお伝えください。 誤認防止のために、氏名(フルネーム)および生年月日をお伝えください。

2. 規則の順守
快適な環境で医療をうけられるよう、社会的ルールを遵守し、病院内の規則や病院職員の指示を守ってください。

3. 迷惑行為の禁止
病院職員に対し、暴力、暴言、セクハラ、診療の妨げとなる行為はお控えください。(遵守いただけない場合は、当院での診療をお断りさせていただく場合があります)

4. 医療行為への参加
医療は医療者との協同行為ですので、医療に参加し協力してください。ご自身の病気や治療で不安や疑問があればお伝えください。

5. 教育への協力
当院は教育・研究機関です。医学生や看護学生などの研修・実習・見学にご理解、ご協力ください。(学生の参加にご賛同いただけない場合は、職員までお申し出ください)

CONTENTS

東京女子医科大学病院 患者さんの権利と責務……4
沿　革……5
概　況……6
病院組織図……7
診療部門紹介……8
外来案内……25
病棟案内……26
構内見取図……27

沿革

明治	明治33年(1900年)12月	東京女醫学校創設(5日:創立記念日)
	明治37年(1904年)7月	私立東京女醫学校設立認可
	明治37年(1904年)9月	東京至誠医院設置
	明治41年(1908年)12月	附属病院開設許可
	明治45年(1912年)3月	私立東京女子医学専門学校設立認可
大正		
昭和	昭和5年(1930年)12月	附属病院竣工
	昭和11年(1936年)10月	第二病棟竣工
	昭和27年(1952年)4月	新制東京女子医科大学発足
	昭和30年(1955年)5月	附属日本心臓血圧研究所(のち心臓病センターと改称)設置
	昭和40年(1965年)4月	附属日本心臓血圧研究所(のち心臓病センターと改称)竣工
	昭和40年(1965年)4月	附属消化器病・早期がんセンター(のち消化器病センターと改称)設置
	昭和42年(1967年)10月	神経精神科病棟竣工
	昭和42年(1967年)12月	附属消化器病センター竣工
	昭和46年(1971年)10月	附属脳神経センター竣工
	昭和50年(1975年)7月	糖尿病センター設置
	昭和53年(1978年)3月	中央病棟竣工
	昭和54年(1979年)4月	腎臓病総合医療センター設置
	昭和55年(1980年)7月	東病棟竣工
	昭和59年(1984年)4月	内分泌疾患総合医療センター設置
	昭和59年(1984年)9月	母子総合医療センター設置
	昭和62年(1987年)3月	糖尿病センター竣工
平成	平成元年(1989年)4月	救命救急センター設置
	平成2年(1990年)10月	呼吸器センター設置
	平成15年(2003年)3月	総合外来センター竣工
	平成21年(2009年)12月	第1病棟竣工
	平成28年(2016年)9月	教育・研究棟竣工
令和	令和2年(2020年)2月	彌生記念教育棟、巴研究教育棟竣工
	令和8年(2026年)2月	医療安全啓発センター開設
	令和8年(2026年)6月	ドクターカー運用開始



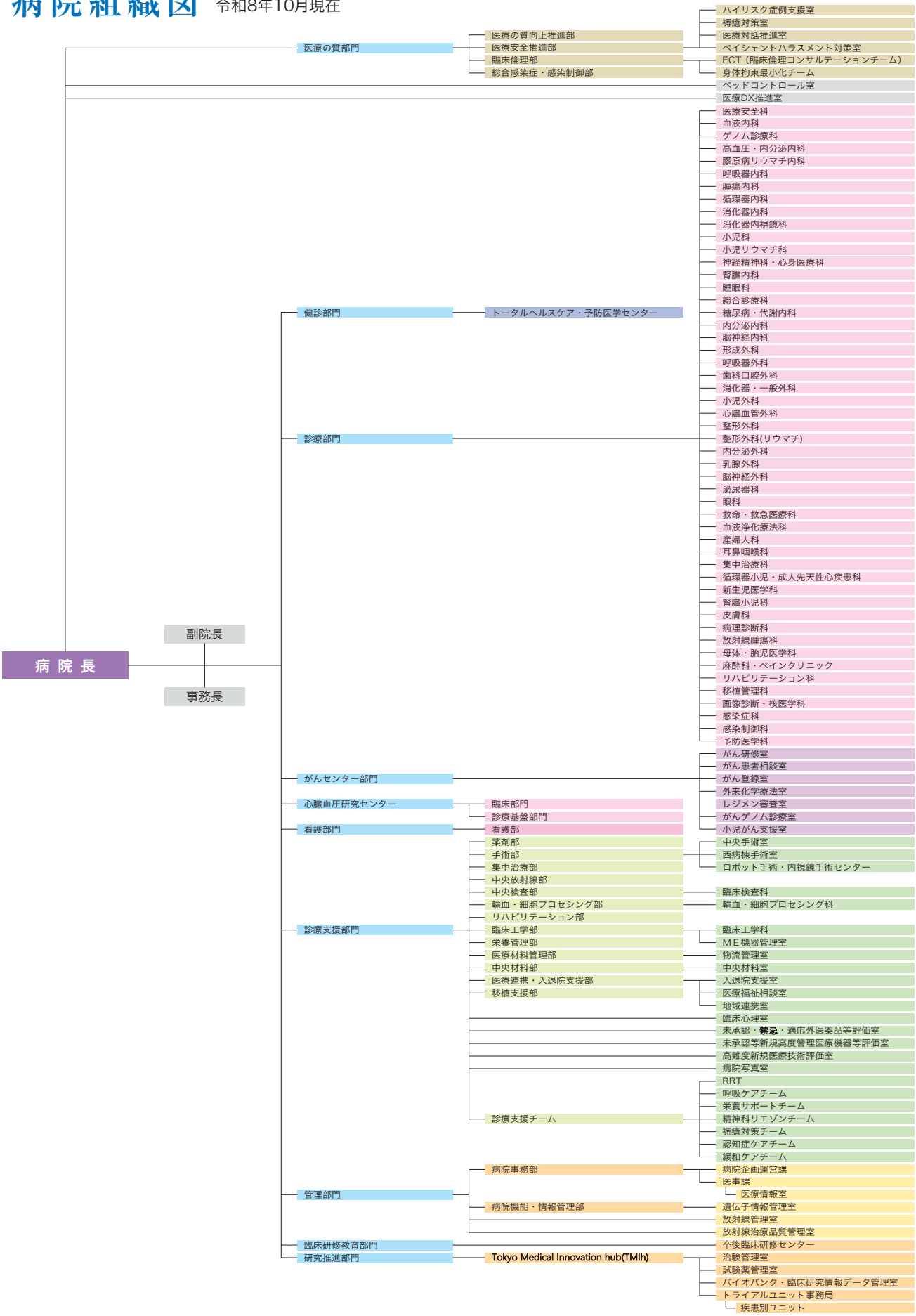
概況

令和8年度6月現在
＊内容は、適宜更新します。最新の情報は、病院のホームページをご覧ください。http://www.twmu.ac.jp/into-twmu/

開設者	学校法人　東京女子醫科大学
病院長	山口　淳一
副院長	中井　陽介　診療部門／診療支援部門担当（内科系） 高木　敏男　診療部門／診療支援部門担当（外科系） 世川　修　医療の質部門担当 岡崎　賢　臨床研修教育部門担当 花房　規男　管理部門担当（病院IR） 林　基弘　診療連携部門担当 明石　定子　労務部門担当 白石　和子　看護部門担当
看護部長	白石　和子
薬剤部長	塩川　満
事務長	今井　克彰
許可病床数	1,128床　（一般：1,101床　精神：27床）
職員数 （令和8年4月現在）	医師　658名 看護師　1,015名 その他　745名 合計　2,418名
患者数 （1日平均）	外来患者数　入院患者数 令和5年　2,869人　603人 令和6年　2,736人　583人 令和7年　2,637人　603人
機能	●救急告示病院 ●臨床研修指定病院 ●災害拠点病院 ●神経難病医療拠点病院 ●肝臓専門医療機関 ●東京都脳卒中急性期医療機関 ●東京DMAT指定病院 ●東京都難病診療連携拠点病院 ●東京都アレルギー疾患医療専門病院 ●公害医療機関 ●臨床修練指定病院 ●エイズ治療拠点病院 ●治験拠点医療機関 ●移植認定施設（心臓・小児心臓・腎臓・膵臓・肝臓・骨髄・末梢血幹細胞） ●総合周産期母子医療センター ●東京都小児がん診療病院
保険医療機関承認	令和6年10月1日～令和12年9月30日

病院組織図

令和8年10月現在



診療部門紹介

血液内科
Department of Hematology

血液内科では、白血病、骨髄異形成症候群、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、真性多血症などの悪性疾患に対して、また種々の貧血や血小板減少症などの良性疾患に対しても、各疾患の専門家を中心としたチームで診療を行っています。通常の化学療法はもちろん、最新の治療法や造血幹細胞移植を積極的に取り入れることにより、患者さん、ご家族の納得のいく治療を提供することを目標としています。また、日本において多発性骨髄腫に対するCAR-T療法を行うことができる数少ない施設の１つです。外来では、常時3～4人の血液内科専門医が診療を行っています。円滑に他科との連携を図ることにより、診断から治療までの期間をなるべく短縮して、安心して治療に臨めるよう努めています。その他、新規薬剤開発にも積極的に取り組んでおり、日本では未承認の薬剤や治療法を使用できる可能性がありますので、お問合せください。

神経精神科
Department of Psychiatry

心の病は国民の健康を脅かす5大疾病のひとつであり、統合失調症、双極症、うつ病、不安症、器質性精神障害などが含まれます。神経精神科では、難治性疾患を含むこれら多様な精神障害に対し、軽症例から重症例まで幅広い診療を行っています。治療の目標を病気からの回復と社会参加の促進に置き、科学的根拠に基づいた標準的で質の高い精神科医療の提供を目指しています。具体的には、エビデンスに基づく薬物療法に加え、医師による認知行動療法（CBT）をはじめとした心理療法、心理教育、精神科リハビリテーションなどを組み合わせ、一人ひとりの状態に応じた包括的な治療を行っています。また、児童思春期専門外来を開設し、発達障害、不登校、不安・抑うつなど、子どもから思春期にかけてのこころの問題にも専門的に対応しています。チーム医療を重視し、医師、看護師、公認心理師、作業療法士、薬剤師、精神保健福祉士が連携して診療にあたっています。さらに、高度医療を担う大学病院としてコンサルテーション・リエゾンにも力を入れ、がんをはじめとする身体疾患の治療中に生じる精神・心理的問題に対して、精神科リエゾン・チームが各診療科と連携しながら専門的な支援を行っています。

小児科
Department of Pediatrics

小児科は、初診時の年齢が主に15歳未満の内科疾患全般を対象とし、全身を診ることができる数少ない診療科の一つです。「子どもは常に成長・発達している」ということが、おとなとの最も大きな違いであることから、常に子どもの成長発達過程に留意した診療を心がけています。外来診療は、原則として、午前中が主に一般外来、午後は、神経、筋、てんかん、アレルギー、発育・発達、内分泌、栄養・消化器などの専門外来としています。但し、緊急性のある疾患については、予約外、時間外来にも積極的な対応を心がけています。
大学病院として、遺伝子治療、分子標的治療などの先端医療を推進する一方、循環器小児科、腎臓小児科、新生児科、小児外科、脳外科小児グループなど小児専門各分野と連携して包括的診療体制を展開しています。

小児外科
Department of Pediatric Surgery

小児は成人のミニチュアではなく、小児医療は高い専門性をもった領域です。小児外科診療科は、都内でも有数の日本小児外科学会の認定施設であり、年間250例以上の小児外科手術を行っています。対象疾患は、出生直後の新生児期から学童期（15歳未満）までの頭頚部・呼吸器・消化器・泌尿生殖器・内分泌臓器・小児腫瘍など、小児にみられる外科的疾患を広い範囲で取り扱っております。15歳以上であっても、先天性疾患の場合は小児外科で対応可能です。先天性の疾患だけでなく、外傷や生後発現する疾患も同じように小児外科指導医・専門医が治療をいたします。特に、日本内視鏡外科学会技術認定取得医（小児外科領域）による腹腔鏡・胸腔鏡を用いた小児内視鏡外科手術や、消化器内視鏡診断・治療には30年以上の実績があり、新生児も含めた多くの疾患に対する診断・治療が低侵襲に行われています。また、小児科、腎臓小児科、循環器小児科、母子総合医療センター新生児部門、脳神経外科（小児グループ）などの、院内小児関連各科との密接な協力体制のもと、小児チーム医療における外科部門の中心的役割を担っています。

整形外科
Department of Orthopedic Surgery

手足、体幹に痛みや機能障害をもたらす骨関節、筋肉、神経などの運動器疾患を治療します。これらの疾患は人口の高齢化に伴い増加し、QOL(クオリティ・オブ・ライフ・生活の質)の低下を招きます。腰痛と関節痛によって、歩くこと、スポーツやレジャーを楽しむこと、労働することなどに不自由を感じている方は増えています。整形外科は全身の運動器すべてを扱うため、当科では、膝関節、股関節、脊椎、肘関節、手の外科、足の外科、骨粗鬆症、関節リウマチなどの各分野にエキスパートの医師がおり、一般的な疾患はもちろん、難治疾患などにも対応しています。例えば変形性関節症に対する人工関節置換術や骨切り術、半月板や靱帯損傷に対する関節鏡視下手術、脊椎変性疾患に対する減圧矯正固定術、脊椎内視鏡手術、上肢の外傷や神経軟部疾患に対する手術、リウマチによる手足変形の手術などを多数行っています。専門外来の受診には混雑が予想されますのでお近くの医療機関からの紹介状をお持ちください。また、受診の際には必ず予約をお取り下さい

形成外科
Department of Plastic and Reconstructive Surgery

形成外科とは、体表外科ともいわれるほど体の表面すべてに携わる外科です。口唇、口蓋裂、指趾の変形(多指〔趾〕・合指〔趾〕症)漏斗胸などの先天異常の治療や、種々の「あざ」や「しみ」に対するレーザー治療、指切断に対するマイクロサージャリーを用いた再接着術、乳房再建などがん切除後の再建術、そして重症から軽症までのやけどの治療を行っています。ケガによるキズやキズ跡をきれいにするために、最新の医療技術にも取り組んでいます。最近では瞼(まぶた)のたるみや下垂を治したりする眼瞼下垂や、レーザーや美容外科手術などのいわゆる「若返り治療」も盛んに行われております。

皮膚科
Department of Dermatology

皮膚科では午前中にあらゆる皮膚疾患(湿疹、水虫、イボ、皮膚がんなど)の初診および再診患者さんを診察しています。初診はなるべく紹介状をご持参いただきたいと思いますが、紹介状なしでも診察しています。午後はパッチテスト、乾癬、アトピー性皮膚炎、水疱症、赤ら顔(しゅさ、しゅさ様皮膚炎)、レーザー治療(しみ、あざ、ほくろ)、小手術(小腫瘍)などの専門外来も開設しています。その他、皮膚生検(皮膚病の一部を小さく切除して組織検査を行うこと)が必要な場合は火曜日と木曜日の午後に行っています。専門外来や皮膚生検・手術外来の受診は、一度午前中の一般外来を受診していただいてから、ご予約をお取りする形で行っています。
難治な皮膚病からニキビやしみなどの美容的な問題まで幅広く診療しており、常に新しい治療薬剤・技術の導入を心掛けています。

産婦人科
Department of Obstetrics and Gynecology

産婦人科の分野は腫瘍、周産期、生殖、女性医学の4つの分野に分かれます。当教室では、それぞれの分野の教授がそろい、先進的な診療を行っています。近年、分娩年齢の高年齢化と悪性腫瘍発症年齢の若年化により、未婚の悪性腫瘍患者や悪性腫瘍合併妊婦が増えています。例えば、悪性腫瘍を患った妊婦を母児共に救命するには、がん治療はもちろんのこと、周産期やNICUだけでなく生殖医療の先進的な技術が必要です。我々はこれまで合併症妊娠などに対する豊富な周産期診療の経験を有し、生殖内分泌の技術に加え、腹腔鏡の専門医も多数在籍しています。今後は、生殖機能を温存したがん治療を教室の柱として、周産期、生殖、腫瘍の専門医がチーム一丸となって、診療に取り組んでまいります。

眼科
Department of Ophthalmology

当科では、患者さん一人ひとりの目の状態や生活に合わせて、より良い視機能(クオリティ・オブ・ヴィジョン:QOV)を実現できるよう、最適な診療を行っています。
一般的な眼科診療に加え、網膜・黄斑・硝子体、角膜、ドライアイ、涙器疾患、緑内障、ぶどう膜炎、神経眼科、斜視・弱視、小児眼科、未熟児、色覚異常、ロービジョンなど、幅広い専門分野に対応しています。充実した検査・診断機器と治療設備を活用し、それぞれの分野で専門性の高い医療を提供しています。
特に、糖尿病網膜症、加齢黄斑変性、網膜静脈閉塞症など、視力低下や失明につながるおそれのある黄斑・網膜疾患の診療に力を入れています。「黄斑疾患総合ケアユニット」では、専門医が連携し、検査から治療、経過観察まで総合的な診療を行っています。
また、白内障や網膜剥離、黄斑疾患をはじめとする網膜硝子体疾患など、さまざまな眼科疾患に対して手術を積極的に実施しています。患者さん一人ひとりに適した治療方法を提案し、視機能の回復と生活の質の向上を目指しています。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科
Department of Otorhinolaryngology - Head and Neck Surgery

耳鼻咽喉科では、鎖骨から上の「頭頸部」領域のうち、脳と眼球を除く広い範囲を扱います。耳や鼻、咽喉（のど）の疾患に加えて、聴覚・平衡覚・嗅覚・味覚といった感覚機能の異常、顔面神経麻痺、咽喉頭の疾患、摂食・嚥下障害、発声の問題、唾液腺疾患、さらには頭頸部に発生する良性・悪性腫瘍の診断と治療を行っています。

当科は特に耳科領域を専門とし、慢性中耳炎や真珠腫性中耳炎に対する鼓室形成術に加えて、低侵襲な経外耳道的内視鏡下耳科手術（TEES）を数多く手がけており、他施設からの見学・技術指導の依頼にも対応しています。高度感音難聴に対しては人工内耳手術プログラムを新たに立ち上げ、手術から術後のマッピングまで一貫した診療体制を整えました。このほか、アブミ骨手術や鼻副鼻腔疾患に対する内視鏡下鼻内手術など多くの専門的な手術も実施しています。また、喘息との合併が多い好酸球性中耳炎や好酸球性副鼻腔炎に対しては、当院の呼吸器センターと密接に連携し、上気道から下気道までを包括したトータルな気道管理を行っており、手術を含めた治療成績の向上が得られています。

さらに、専門外来として実耳測定に基づく補聴器適合、口腔乾燥・味覚障害外来、頭頸部腫瘍外来を設け、疾患の治療だけでなくQOL（クオリティ・オブ・ライフ）の改善にも力を入れた診療を目指しています。

放射線腫瘍科
Department of Radiation Oncology

放射線腫瘍科は、年間約700名の患者さんに放射線治療を提供しています。悪性腫瘍全般はもとより、ケロイドなどの良性疾患まで、幅広い疾患に対応しております。

当科には、コーンビームCTを標準搭載した最新鋭高精度リニアック2台に加え、腔内・組織内照射に対応するイリジウム線源リモートアフターローディングシステム、X線透視とCTを融合した位置決め装置など、充実した治療基盤を整備しています。これらの設備を駆使し、体幹部定位放射線治療（SBRT: Stereotactic Body Radiation Therapy）、強度変調放射線治療（IMRT: Intensity-Modulated Radiation Therapy）、画像誘導放射線治療（IGRT: Image-Guided Radiation Therapy）といった高精度治療を、肺がん・肝がん・脳腫瘍・前立腺がん・食道がん・頭頸部がん・直腸がん・子宮頸がんなど幅広い臓器がんに対して積極的に展開し、高い治療効果と有害事象の最小化を両立させています。

当科の特色として、神経膠腫や小児脳腫瘍症例の受け入れ実績が豊富であること、前立腺がんに対して寡分割照射やSBRTなど患者さんのライフスタイルに応じた複数の治療選択肢を提供していること、そして乳がん治療において体表面画像照合型IGRTを用いた先進的照射法を導入していることが挙げられます。

放射線腫瘍医のほか、医学物理士、診療放射線技師、放射線治療専門看護師など多職種から成る専門チームが一丸となって診療にあたり、厳格な品質管理体制のもとで治療の精度と安全性を担保しています。

最先端のテクノロジーと専門的知見、そして患者さん一人ひとりに寄り添う姿勢――この三つを礎に、「ここで治療を受けてよかった」と実感していただける放射線治療の実践を、私たちは目指し続けます。

画像診断・核医学科
Department of Diagnostic Imaging and Nuclear Medicine

画像診断・核医学科は、従来の放射線科業務の3本柱である、画像診断、核医学、放射線治療の中の、画像診断と核医学を受け持つ診療科です。画像診断では、単純X線撮影 マンモグラフィー、CT、MRIの読影や、超音波や血管撮影の検査および診断を行っています。また、CTや超音波検査を用いた細胞診や組織診とドレナージに加え、血管内治療などのインターベンショナルラジオロジー（IVR）も担当しています。核医学では、昔から広く行われている骨シンチ、ガリウムシンチなどの一般核医学から、SPECTによる心臓や脳神経の機能診断PETを用いた分子イメージングを担当しています。最近では認知症の検査としてアミロイドPETも多く行っています。さらに放射性同位元素（RI）を用いた治療では、ヨード（1-131）によるバセドウ病や甲状腺がんの治療、塩化ラジウム（Ra-223）による骨転移治療、ゼバリン（Y-90）による悪性リンパ腫の治療、ならびにLu-177を用いた神経内分泌腫瘍の治療を各診療科と連携して行っています。以上のような業務に対し、診療放射線技師や看護師とも連携し、チーム医療を実践し、専門性が高くかつ安全な医療の実現に努めております。

麻酔科
Department of Anesthesiology

麻酔科は、最先端の医療技術を用いて、安全で質の高い外科治療を支える診療科です。私たちは、手術中の全身管理だけでなく、手術前後の評価やリスク管理を含めた「周麻酔期医療」を実践し、患者さん一人ひとりの状態やご希望に応じた個別化医療を提供しています。

東京女子医科大学病院では、年間約7,000件の手術麻酔を担当しており、一般外科、整形外科、脳神経外科をはじめ、心臓血管外科、小児外科、産婦人科など、高度かつ専門性の高い手術の麻酔管理を数多く行っています。特に、心臓血管麻酔、区域麻酔、産科麻酔、小児麻酔を重点領域とし、高難度症例にも対応できる体制を整えています。

また、麻酔科ならではの専門性を活かし、ペインクリニックでは慢性疼痛の診療、病棟ではがんに伴う痛みや不安への対応、産科では分娩時鎮痛（無痛分娩）やハイリスク妊娠・分娩における麻酔管理など、手術室の枠を超えた幅広い診療を行っています。

当院では、麻酔科専門医・専攻医を中心に、周麻酔期看護師（PAN）、手術室看護師、周術期専属薬剤師、手術室専属臨床工学技士など、多職種が密接に連携しながら周麻酔期医療を支

えています。チーム医療を通じて、患者さんにとって最も安全で安心できる医療を提供することを目指しています。そして単に「眠らせる」診療科ではなく、患者さんの痛みや不安に寄り添い、手術前から術後まで一貫して支える、周麻酔期医療のプロフェッショナルとして、日々精進を続けております。
今後も患者さんとご家族の皆様が、安心して治療を受けていただけますよう、私たちはこれからも努力を重ねてまいります。

歯科口腔外科
Department of Oral and Maxillofacial Surgery

歯科口腔外科では、歯、口、顎骨の疾患の診断と治療を行っております。親知らず(智歯)、口腔がん、顎変形症(骨格的な不正咬合)、顎骨のう胞・腫瘍、歯が原因の炎症、口内炎などの口腔粘膜疾患、歯科インプラント治療、顎関節症、顎関節疾患(脱臼、強直症)、歯や口の中の外傷、顎の骨折など口腔外科全般の診断と治療を口腔外科専門医が行います。
口腔がんの治療は、形成外科、放射線腫瘍科、腫瘍内科、耳鼻咽喉・頭頸部外科などの院内各科と連携を図り治療を提供しております。
顎変形症治療は、保険診療が適応され、歯科矯正と手術を併用して噛み合わせを治します。歯科インプラント(人工歯根)治療には学会認定の研修施設として力を入れております。
また、心臓病、糖尿病、腎臓病、血液疾患などの患者さんの抜歯は院内他科と連携し治療にあたっています。特にワーファリンなどの抗凝固薬、アスピリンなどの抗血小板薬による抗血栓療法中の患者さんの抜歯は薬を中止することなく行っており、安全のために入院して抜歯を行うこともあります。さらに、睡眠科と連携し、睡眠時無呼吸症の治療のために口腔内装置の作製と口腔機能低下症の診断と治療を行っております。
以上のように幅広い口腔疾患に対して、高い専門性と安全な医療を提供しております。

総合診療科
Department of General Medicine

自分たちでいろいろな病気を横断的に診ています。高度先進医療を提供しないことが多いですが、守備範囲の幅の広さが売りになっております。また他部門の医療や保健、福祉の部門の力を借りつつ皆様をケアします。場合によっては他の医療福祉施設などとの連携を配慮していきます。患者様の背景、そして家族や地域を診る視点も重視しています。
取り扱うおもな疾患は、他施設で診断がつかない、または多くの疾患がある、多臓器に係るような疾患に罹っていらっしゃる患者さんで、専門診療よりも当科がふさわしいと考えられる場合に診させていただいております。年齢や性別、臓器を問わず診療させていただいておりますが、高度で特殊な医療や治療は行えません。外来、そして必要があれば病棟で診療させていただきます。
学生や若い先生の教育に力を入れております。また診察においても皆様のご協力を仰ぐことも多々あるかもしれません。皆様のニーズに合った医療を心掛けつつ、少子高齢化する未来の日本に合致した医療を模索したいと考えております。

リハビリテーション科
Department of Rehabilitation Medicine

各科からの依頼により、入院患者と外来患者さんに対して病気やケガにより生じた障害の治療を行っています。リハビリテーション科医、理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、言語聴覚士(ST)、看護師、歯科衛生士らのチーム医療で、機能障害や能力低下をできるだけ軽減し、患者さんが元の生活にできるだけ近い形で復帰できるように依頼科とも連絡をとりながら進めています。リハビリテーション科医師による診察・障害の評価の後、理学療法(筋力強化、基本動作訓練、歩行訓練など)、作業療法(上肢の機能訓練、日常生活動作訓練、認知機能訓練など)、言語療法、嚥下訓練などの治療、生活指導、家族への介助指導などを行っています。当院の特徴は急性期の患者さんに対して、SCU、ICUやベッドサイドより入院直後からリハビリテーションを開始していることです。また、一部の病棟だけですが、リハビリテーション栄養口腔連携体制加算を算定に貢献しており、早期リハビリテーションや土日祝日のリハビリテーション、栄養管理、口腔管理との連携に尽力しています。

病理診断科
Department of Surgical Pathology

病理診断科は以下の業務を通じ、女子医大病院の医療に貢献しています。

1. 組織診断:生検または手術によって採取される組織を肉眼および組織学的に検討し、診断を行います。年約11,000件。一部の症例では個別化医療のため、治療の法的となる分子の発現などを検討しています(コンパニオン診断)。ゲノム診療にも参画しています。
2. 細胞診断:喀痰、尿、甲状腺や乳腺腫瘍などから採取される細胞を検討し、疾患の推定診断を行います。年約8,000件。
3. 術中迅速診断:手術中に採取された組織や細胞から標本を作製、検体提出後15-20分のうちに診断を行います。年約1,000件。
4. 各診療科との症例検討会や研修医教育プログラムへの参画(特に全学臨床病理症例検討会の運営)。これらの業務を通じ、病理専門医、細胞診専門医、分子病理専門医、細胞診断士を育成します。また臨床病理学的研究を推進し、各診療科医師や初期研修医、学生などの学会、論文発表などの学術的発信を支援しています。
5. がん遺伝子パネル検査のための試料作製、データ解析のためのエキスパートパネルに参加しています。
6. 医学部基礎医学教室である人体病理学分野と協力して病理解剖を担当し、亡くなられた患者様の病態解明、治療効果の検討などに尽力しています。

腫瘍内科
Department of Medical Oncology

東京女子医科大学腫瘍内科は、がん（悪性腫瘍）の診断・治療・予防を専門とする「腫瘍内科学」に基づき、教育・研究・診療を三本柱として活動しています。
がん罹患者数の増加に伴い、がん治療は医療現場においてますます重要な課題となっており、当科では最新の知見と技術を取り入れた高度ながん医療の提供に努めています。
診療の特徴としてがん薬物療法（化学療法、免疫療法、分子標的療法など）や支持・緩和ケアを中心に、患者さん一人ひとりに最適な治療法を提案します。他診療科や多職種と連携し、チーム医療による総合的ながん治療を実践するとともにアドバンス・ケア・プランニング（ACP）の支援を行っています。東京女子医科大学病院として、がん治療の進歩に貢献するため、当科では新しい治療法の開発にも積極的に取り組む体制を整えています。新しい治療を臨床試験や治験として提供するとともに、産学連携による新規治療の創出、患者さんのニーズに応える個別化医療の推進など、未来のがん医療を切り拓くための準備を進めています。これにより、患者さんにより多くの治療選択肢を提供し、がん治療のさらなる発展に寄与してまいります。
がん治療は日々進歩し、治療法も複雑化しています。国内でもがん薬物療法を専門診療科・専門医が行うことが質および医療安全上の重要となっています。おかかりの病院や診療科で治療や生活等でお困りのことがあれば、どうぞお気軽にご相談ください。

睡眠科
Division of Comprehensive Sleep Medicine

当科の前身は、東京女子医大附属青山病院睡眠総合診療センターで、2010年より睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠呼吸障害、むずむず脚症候群、レム睡眠行動障害、ナルコレプシーなどの過眠症、不眠症（入眠困難、中途覚醒、早朝覚醒）などの睡眠障害の検査、診断、治療を行ってまいりました。
近年、24時間社会、IT化がすすみ、また食の欧米化、運動不足などライフスタイルの変化により、不眠、睡眠覚醒概日リズム障害、睡眠時無呼吸症候群などの睡眠障害をきたす患者さんが増えています。睡眠障害は、事故やヒューマンエラーなど社会的問題、うつなどの気分障害、生活習慣病と密接に関係し、総合的、専門的に診断、治療していくことが重要です。当科では、睡眠医療、循環器内科の専門医が診療にあたり、精神科（向精神薬の調整など）、歯科口腔外科（口腔内装置作成など）、泌尿器科（夜間頻尿など）、耳鼻科（鼻閉感など）、神経内科（神経疾患の合併など）、呼吸器内科（慢性閉塞性肺疾患の合併など）、ゲノム診療科（遺伝性疾患の合併など）など多数の診療科と連携をとりあっています。
入院検査は、終夜睡眠ポリグラフィー検査、昼間の眠気を客観的に評価する反復睡眠潜時検査を施行します。閉塞性睡眠時無呼吸症候群では、持続陽圧呼吸療法の導入や口腔外科での口腔内装置による治療を行っています。入眠困難、中途覚醒、早期覚醒、睡眠薬の調整など睡眠に関する悩みがあればお気軽にご相談ください。
また高度肥満症（BMI：27以上）を伴う睡眠時無呼吸症候群への保険での減量治療（GLP-1受容体作動薬）も行っております。月～金曜日に初診を受けておりますが、完全予約制になっておりますので、初診・再診ともに当院予約センターまでご連絡ください。睡眠検査入院をご希望の場合も、まず初診外来で承ります。

予防医学科
Department of Preventive Medicine

予防医学科では会員制の健康診断プログラムを実践しています。大学病院ならではの最新の医療設備を駆使した質の高い検査を実施し、後日行われる生活指導との組み合わせで、数値のみの判断ではなく、全人的な健康診断結果を提供しております。
近年では、がん検診の効果を科学的な方法で評価したうえで実施するのが、国際標準となっております。当科では、厚生労働省の「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」に定められた、がん死亡率の減少について、科学的根拠のあるがん健診を中心に、受診者の皆様のニーズに合わせプログラムを構築しております。また、健康診断の後に受けて頂く生活指導では、健康診断の結果をお伝えするだけではなく、生活習慣病進行予防を介し、動脈硬化性疾患発症、進展予防を目指しており、専門的かつ、きめ細かな指導を行っています。
健診により何らかの問題が見つかった場合は、当院の専門診療科にご紹介し、迅速な対応を受けることができるようお手伝いいたします。
我が国の疾病構造が変化してゆく中、さまざまな疾患やそれらの危険因子の疫学的動向を的確に把握し、最新の医療をもって受診される皆様のニーズにお答えできるよう、スタッフ一同一丸となって、予防医学を展開してまいります。

臨床検査科
Department of Clinical Laboratory

臨床検査は診療情報のひとつですが、その役割は増加しており、臨床検査なしで診療を行うことは不可能な環境になりつつあります。さらに、新規の検査項目の開発や検査技術の発展に伴い、臨床検査情報は高度化され膨大化しています。このような状況で、医師がより客観的な診療情報を得るために、どのような検査を行うか、どのような検査材料を採取するのか、また報告された結果をどのように判断し診察や治療に生かしていくかが肝要になります。
臨床検査科では、臨床検査専門医としての医学的見地から、中央検査部の検体検査室、採血・採尿検査室、心電図検査室、心臓超音波検査室、腹部超音波検査室、内視鏡検査室、呼吸機能検査室、脳波・筋電図検査室、病理検査室、遺伝子関連検査室、移植関連検査室、診療科支援検査室などの品質保証と精度管理を行っています。中央検査部は2010年にISO15189を取得しており、安全・正確・迅速に24時間体制で精度の高い迅速検査を提供できるよう、関連各科の医師、検査技師と日々協力しています。

集中治療科
Department of Intensive Care Medicine

集中治療室(ICU)、ハイケアユニット(HCU)は、病院内の急性期医療の核となる部門の一つです。呼吸、循環、代謝、その他の重篤な急性臓器不全を有する患者さんを24時間体制で管理し、集中的かつ効果的な治療により救命と回復を図ることを目的としています。集中治療科医が全身管理と診療チームのリーダーを担い、ICU・HCU看護師とともにICU18床、HCU12床を運用し、各診療科が行う高度な治療を支援しています。また、医師、看護師、臨床工学技士、理学療法士、薬剤師、管理栄養士などからなる多職種チームで治療計画を共有し、それぞれの専門性を活かして協働することで、幅広い年齢層と多彩な急性期病態への対応に努めています。当院では、難易度の高い手術や、他の医療施設では対応が難しい複雑な疾患を合併する患者さんの手術が多く行われており、ICU・HCUではそのような患者さんの術後を中心とした周術期管理を担っています。さらに、院内で内科的治療中に発症した急性呼吸不全、急性循環不全、敗血症性ショックなどに対して、人工呼吸管理、血液浄化療法、ECMO、機械的循環補助法などの高度な生命維持療法を適切に組み合わせ、重症患者さんの治療を行っています。治療にあたっては救命のみならず、集中治療後症候群(PICS:Post-Intensive Care Syndrome)にも配慮し、せん妄予防、早期離床、栄養管理、睡眠環境の調整、身体機能・認知機能・精神面の回復支援など、集中治療後の生活の質を見据えた管理にも取り組んでいます。加えて、院内急変対応チーム(RRT)や呼吸ケアチーム(RST)を編成し、重症化の早期発見、人工呼吸管理の質向上、医療安全の推進に貢献しています。関連病院のみならず、他施設からも各診療科を通じて患者さんを積極的に受け入れておりますので、重症管理が必要と考えられる患者さんについては、まず該当診療科へご連絡ください。

移植管理科
Department of Organ Transplant Medicine

東京女子医科大学病院は、心臓、腎臓の臓器移植を行うことのできる臓器移植施行病院として日本臓器移植ネットワークに登録されており社会的にも非常に重要な役割を担っています。また、生体腎移植のような生体ドナーからの移植数においても全国有数の症例数を誇っており本邦における移植医療を担う中核的な施設となっています。これまでは室長(兼任)以下、各専門分野の移植コーディネーター4名およびドナーコーディネーター1名が各診療科に分散している形で運営されてきました。今後は臓器横断的に以下のような業務を移植管理科が中心になって取り組んでまいりたいと考えております。

①移植待機患者(日本臓器移植ネットワーク)の管理
②臓器移植患者のデータ報告
③移植前後における臓器移植検討会の開催
④普及啓発に関する業務(日本臓器移植ネットワークとの連携)
⑤臓器移植に関係する免疫学的検査の質の担保



循環器内科
Department of Cardiology

当科は、虚血性心血管疾患、不整脈、心筋症、心不全、弁膜症、大血管疾患、先天性心疾患など、循環器疾患全般に対して高度な診断・治療を行っています。
急性心筋梗塞や狭心症に対する心臓カテーテル治療、下肢を中心とした全身の血管に対するカテーテル治療を多数実施しており、心臓血管外科との緊密な連携のもと、手術困難な重症弁膜症に対するカテーテル治療(TAVI、M-TEER)も積極的に行っています。
不整脈領域では、頻脈性不整脈に対するカテーテルアブレーションを年間約400例実施し、心臓ペースメーカー、植込み型除細動器(ICD)、重症心不全に対する心臓再同期療法機能付除細動器(CRT-D)などのデバイス治療も年間約300例に達し、大学病院としてトップクラスの症例数を誇ります。
また、心臓植込みデバイスの感染症例に対するシステム抜去術も積極的に行っており、他病院から多くの患者さまをご紹介いただいています。
重症心不全については、関東の心臓移植認定施設としての責務を果たすべく、他施設からの重症心不全症例の受け入れや相談に対応し、心臓移植申請の検討、外科との協働による集約的な心不全管理を行っています。
心不全管理の過程で、必要に応じて植込み型補助人工心臓(LVAD)へつなげる体制を整えており、診療科を超えたシームレスな医療を提供しています。
さらに、循環器小児科と連携し、先天性心疾患に対するカテーテル治療にも力を入れており、カテーテル的肺動脈弁留置術(TPVI)については全国でも上位の施行件数を誇ります。
また心臓画像診断では、心臓PET検査としてサルコイドーシスの活動性炎症の評価や、アンモニアPETによる心筋血流量の定量評価を行っています。アンモニアPETによる定量的血流評価まで実施できる施設は国内でも限られており、当科の特徴の一つとなっています。
今後も、冠動脈疾患、末梢血管疾患、不整脈、心不全、弁膜症、大血管疾患、人工弁、先天性心疾患など、各分野のエキスパートによる専門外来を中心に、相互連携をさらに強化し、患者さまに対して日本最高水準の医療を継続的に提供できるよう、全人的医療の実践に努めてまいります

心臓血管外科
Department of Cardiovascular Surgery

当科は1949年に榊原 仟先生が東京女子医学専門学校へ赴任され、外科学講座を開かれたことに源を発し、2024年に開講75周年を迎えました。この間、榊原先生の手によって本邦初の心臓手術(動脈管開存結紮術)や開心術が行われるなど、日本における心臓血管外科の歴史はまさにこの女子医大から始まっております。多くの経験に基づく揺るぎない伝統は現在に至るまで引き継がれ、我々心臓血管外科教室の根幹を成しております。
当科では新生児から高齢者の方までのあらゆる心臓・大血管疾患に対して外科治療を行っております。患者さまにとって体の負担が少ない低侵襲治療の標準化を進めており、大血管に対する血管内治療(ステントグラフト)や経カテーテル的大動脈弁留置術(TAVI)、さらには最新のデバイスを用いた低侵襲心臓手術(MICS)での冠動脈バイパス術、縫合不要の人工弁(sutureless valve)を用いた弁膜症手術を導入しております。また、重症心不全の患者さまに対しては、植込み型補助人工心臓手術や心臓移植、さらに細胞シートを用いた再生治療など、本学ならではの高度先進医療を積極的に行っております。
各領域に高度な技術と経験を有する専門医を揃え、循環器内科、循環器小児科、麻酔科、集中治療科、看護部、臨床工学部と密接に連携し、良質で安全なチーム医療に取り組んでおります。スタッフ全員が患者さまに寄り添った医療を実践していくことをお約束致します。

循環器小児・成人先天性心疾患科
Department of Pediatric Cardiology

当科は、先天性心疾患の患者様を、文字通り、ゆりかごから墓場まで、シームレスな診療体制で、全人的なケアを提供しております。胎児診断に始まり、新生児、小児期から成人期に至るまで一つの診療科で、先天性心疾患、不整脈、心不全(心臓移植)まで、カテーテル治療を含む全ての治療を提供できるのは、女子医大ならではの強みです。心房中隔欠損症の閉鎖、経皮的肺動脈弁留置術等、手術に変わる低侵襲なカテーテル治療の数、成績共に日本でも有数の施設のひとつとなっています。小児の不整脈や先天性心疾患に合併した小児や成人の不整脈に対するカテーテルアブレーションも良好な成績をあげています。
また、心筋症、先天性心疾患の術後の重症心不全に対しても、体外式/植込み式補助人工心臓治療、心臓移植が可能であり、その成績は世界でもトップクラスです。心臓血管外科や循環器内科と密接に連携して、高度な、しかも安全な医療を提供しています。未熟児で先天性心疾患がある場合には、母子総合医療センター新生児部門(NICU)と協力して治療を行います。
成人先天性心疾患患者様が妊娠された際には、母子総合医療センター母性部門と協力して、妊娠・分娩管理が可能であり、全国から難しい患者様を受け入れております。24時間365日、夜間も循環器小児科医が常駐して救急患者にも対応しております。全ての心臓病の患者様とご家族の笑顔のために、全身全霊で治療にあたっております。

消化器内科
Department of Gastroenterology

消化器内科は、消化管(食道・胃・小腸・大腸)、肝臓、胆道/膵臓の疾患を担当しています。腫瘍・炎症・免疫・感染など様々な要因により発生する消化器疾患全般の診断・治療を、消化管・肝臓・胆道/膵臓の専門診療グループが対応しています。
消化管領域では近年増加している炎症性腸疾患(潰瘍性大腸炎・クローン病)の診療に注力し、消化器外科とも連携しなが

ら、生物学的製剤・顆粒球吸着療法などの内科的治療を担当しています。また食道胃静脈瘤に対する内視鏡治療の経験も多く有しています。
肝臓領域では、脂肪性肝疾患・自己免疫性肝疾患の多くの診療経験に加えて、フォンタン術後などのうっ血性肝疾患の診療も行っているのが特徴です。
胆道・膵臓領域は、悪性腫瘍から良性疾患まで様々な病態に対して超音波内視鏡(EUS)や内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)なども用いながら、正確な診断、適切な治療を消化器外科と連携しながら行います。胆道鏡・膵管鏡、EUS下ドレナージやバルーン内視鏡下ERCPなどの、専門的な内視鏡診療の経験も多く、様々な病状に対応可能です。胆道癌・膵臓癌では抗腫瘍療法に加えて、合併する閉塞性黄疸や十二指腸閉塞に対する内視鏡治療も行いながら診療しています。
消化器内科では、幅広い消化器疾患に対応するため、各領域の専門知識・技術を持ったスタッフが外来、入院の診療を担当し、また消化器外科、消化器内視鏡科と連携し、「患者さん中心の医療」の提供に努めています。

消化器・一般外科
Department of Digestive and General Surgery

消化管、肝胆膵の各チームが、それぞれ専門性の高い高度医療を提供しています。一方で消化器外科として全体で治療方針を決定するなど、常に全スタッフの協力の下で診療に当たっています。また手術治療は腹腔鏡やロボットによる低侵襲手術が多くを占めるようになり、在院日数の短縮化、医療資源の効率化を図っています。さらに当院では伝統的に消化器内科や化学療法科、放射線科と密に連携をとっており、患者さん第一の治療を行っています。
上部消化管疾患の内訳は、食道がん、胃がん、GISTなどの腫瘍性疾患のほか、逆流性食道炎や食道裂孔ヘルニアなどの良性疾患の手術治療にも対応しています。特に食道がんや胃がんに対するロボット手術を多くの症例に行っており、周術期の薬物治療や放射線治療と組み合わせて治療成績の向上に努めています。下部消化管疾患では、大腸がんが多くを占めますが、潰瘍性大腸炎やクローン病、大腸憩室炎などの炎症性腸疾患を含めてほとんどを腹腔鏡またはロボット手術で行っています。進行した直腸がんには術前治療として放射線治療や薬物治療を先行して手術を行うことで、治療成績の向上や安全な肛門温存手術に当たっています。炎症性腸疾患は内科治療の進歩もめざましく、内科と連携して必要に応じた外科手術を主に腹腔鏡手術で行っています。
肝胆膵疾患では、肝臓がん、膵臓がん、胆嚢・胆管がんなどの悪性疾患のほか、胆嚢炎、胆石症、膵・胆管合流異常などの良性疾患の治療も多数に行っています。急性胆嚢炎の緊急手術も数多く行っており豊富な経験の下に安全な治療体制ができています。なかでも近年特に増加傾向の膵臓がんは、内科と連携して早期がんの診断・治療に取り組んでおり、その治療の多くを腹腔鏡手術で行っています。
また研究分野では手術画像から人工知能AIによる手術支援、主に各種悪性腫瘍に関連する臨床研究などに取り組んでいます。

消化器内視鏡科
Department of Endoscopy

消化管(食道・胃・十二指腸)内視鏡検査は年間約9000件、大腸内視鏡検査は約5000件と多数行っています。当科は、消化管腫瘍に対する内視鏡診断と低侵襲内視鏡治療(ESD)を中心に診療を行っており、当科指導医は食道、胃、大腸全ての消化管ESDを非常に安全に行っており、その症例数は国内でもトップクラスを誇っています。また、拡大内視鏡も含めた内視鏡診断にも力をいれております。
早期胃がんで範囲診断が難しい患者様、他施設で内視鏡治療が困難と診断された大腸腫瘍の患者様もぜひ当院にご紹介いただけますと精密検査で適応をしっかり判断したうえでベストの治療を選択させていただきます。外来初診日から数えて、3週間以内に治療を行えるようにスケジュールを組み、患者様にご満足いただけるように努めております。
また、内科・外科およびメディカルスタッフと連携し、チーム医療を推進し、安全で質の高い内視鏡診療をモットーに診療にあたっております。

脳神経内科
Department of Neurology

脳神経内科は、脳、脊髄、末梢神経、筋肉に生じる幅広い疾患を診療する診療科です。対象となる症状は、頭痛、めまい、しびれ、脱力、歩行障害、ふるえ、物忘れ、言語障害、けいれん、意識障害など多岐にわたります。主な疾患としては、脳卒中、パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経変性疾患、多発性硬化症や視神経脊髄炎などの神経免疫疾患、アルツハイマー病をはじめとする認知症、末梢神経障害、てんかん、筋炎、脳炎、髄膜炎などがあります。
東京女子医科大学脳神経内科では、救急診療から慢性疾患の長期管理まで、幅広い神経疾患に対応できる診療体制を整えています。特に、脳卒中、神経心理、神経免疫、神経生理、末梢神経疾患などの領域において、専門性の高い診療と研究を展開しており、各分野の強みを活かした総合的な神経診療を行っています。
脳卒中診療においては、脳神経外科とともに脳卒中集中治療室(SCU)を運営し、急性期脳梗塞に対する血栓溶解療法や血栓回収療法を積極的に行っています。また、脳卒中以外の神経救急疾患においても、関連診療科と緊密に連携し、迅速かつ切れ目のない診療を実践しています。
近年、脳神経内科領域では治療法の進歩がめざましく、急性期脳梗塞治療、パーキンソン病の薬物治療、神経免疫疾患に対する疾患修飾薬、認知症に対する抗体医薬など、新たな治療選択肢が次々と臨床現場に導入されています。当科では、こうした最新の治療にも積極的に取り組み、患者さん一人ひとりの病状や生活背景に応じた最善の医療を提供することを目指しています。
神経疾患では、診断に時間を要する病気や、長期にわたる治療・療養が必要となる病気も少なくありません。当科では、専門的な検査と診療を通じて原因を丁寧に見極めるとともに、必要に応じて他診療科や地域の医療機関とも連携し、患者さんが安心して治療を続けられるよう支援してまいります。

脳神経外科
Department of Neurosurgery

今年度より、50余年の歴史を持つ『脳神経外科学講座』は、これまでの「一講座一分野制」から、「一講座五分野制」へと大講座として生まれ変わりました。さらに、脳神経内科や関連他科とも連携し、高度な治療をより身近に提供することを目的に、9つの疾患別ユニットと４つの臨床研究ユニットで構成された『脳神経研究センター』が制定され今秋に実働いたします。中でも『脳卒中・神経救急ユニット』は、本学における地域性ニーズを鑑みすでに始動させております。「失神・意識障害」など日常急を要する患者さんがいらっしゃいましたら24時間体制で応需致します。連携診療による迅速かつ正確な診断、必要に応じた高度な治療提供、専門スタッフによるSCUケアから回復期リハビリ病院への紹介、そしてその後の逆紹介に至るまで、患者さんの人生を線で捉えた一貫した診療体制で応えて参ります。一方で、当科は日本脳神経外科学会の中でも『Subspeciality軍団』として高く評価を頂き、全国・海外から多くの患者さんにもお越し頂いております。高度な脳血管障害外科手術（難治性動脈瘤・脳動静脈奇形（AVM）・もやもや病バイパス手術など）・悪性脳腫瘍に対する集学的治療（Hyper SCOTによる術中MRI・覚醒下手術など）や頭蓋底外科・振戦やジストニアなどへの定位機能外科・頭蓋変形から悪性脳腫瘍手術を手掛ける小児脳神経外科・転移性脳腫瘍から三叉神経痛まで開頭せずに治癒せしめるガンマナイフなどが特色となっております。救急から高度医療まで、すべての脳新患に対して即応できるようこれからも精進して参ります

腎臓内科
Department of Nephrology

当科は「患者さんとともに」を基本理念として、日々の診療に取り組んでおります。診療内容は、腎炎・ネフローゼ症候群・遺伝性腎疾患・慢性腎臓病などの腎疾患全般に加え、膠原病や高血圧症の診断・治療です。
腎生検を積極的に実施し、正確な診断に基づいた適切な治療を心掛けています。また、多発性嚢胞腎をはじめとする遺伝性腎疾患に対する新規治療にも積極的に取り組むとともに、希少腎疾患を含む難治性腎疾患に対しても専門的診療を行っています。さらに、血液透析（HD）、腹膜透析（PD）、腎移植後管理を含めた腎代替療法全般を担当しており、透析導入後の全身管理、バスキュラーアクセスの作製・管理、経皮的血管形成術（PTA）にも幅広く対応しています。
かかりつけ医との病診連携を重視し、慢性腎臓病の早期段階から患者教育を含めた積極的な介入を行うことで、重症化や合併症の予防に努めています。また、透析施設との密接な連携のもと、新規透析導入から透析患者さんの合併症管理まで一貫した診療を行っています。加えて、腎移植後の腎障害の診断・治療にも対応しており、セカンドオピニオン外来では治療方針の決定が難しい症例や難治性疾患についてもご相談をお受けしています。地域の先生方と密接に連携しながら、患者さん一人ひとりに最適な医療を提供できるよう努めています

泌尿器科
Department of Urology

当科は腎臓がん・前立腺がん（前立腺腫瘍センター）、膀胱がん、腎盂がん、尿管がん、副腎腫瘍などの泌尿器科腫瘍、腎移植を主体とした腎不全医療、女性排尿障害センター、小児泌尿器疾患などの専門外来を中心に診療を行っています。泌尿器腫瘍の手術のほぼ全てはロボット支援手術を行なっており、年間約400例の手術を実施しております。低侵襲手術は患者さんの身体的負担を減らせるともに、入院期間短縮など医療経済的にも社会に貢献しております。さらに、腎癌に対するロボット支援腎部分切除術、前立腺癌に対する神経温存ロボット支援前立腺全摘に代表される機能温存手術も積極的に行なっております。また、ロボット支援手術については腫瘍関連のみならず、ロボット支援腎盂形成術、ロボット支援仙骨膣固定術などの良性疾患に対しても多くの実績があります。腫瘍関連については、手術のみならず抗がん剤治療、放射線治療も泌尿器科を中心に行なっております。抗がん剤治療については、多くの臨床治験を手がけており、適切な治療と知識を届けることを心がけております。また腎移植の10年生着率は90％を超えつつあります。泌尿器科チームとしては約150例腎移植を行っております。生体腎移植が中心となっておりますが、脳死下腎移植に対応できるよう、体制を整えております。またこれら専門外来だけでなく前立腺肥大症、尿路感染症などの泌尿器科全般にわたる診療も行っています。泌尿器科は安全で信頼される診療を提供できるよう、日々努めて参ります。

腎臓小児科
Department of Pediatric Nephrology

腎臓小児科では、先天性腎尿路異常をはじめ、腎炎、ネフローゼ症候群、急性・慢性腎不全まで、小児期にみられる腎・泌尿器疾患を幅広く診療しています。
小児腎臓病の診療には、医師だけでなく、看護師、薬剤師、移植コーディネーター、ソーシャルワーカーなど、さまざまな職種が連携して取り組むチーム医療が欠かせません。また、東京女子医科大学病院内の泌尿器科、腎臓内科、血液浄化療法科、小児外科、小児科、循環器小児科、新生児科などの診療科に加え、院内の各部門とも緊密に連携できる環境にあり、総合的かつ専門性の高い医療を提供しています。
腎生検は年間約60～80例施行しており、その内訳は自己腎が10～20例、移植腎が50～60例です。また、高度で専門的な小児腎臓病治療として、腹膜透析は年間10例前後、血液透析は年間5～10例程度実施しています。さらに、年間10～15例程度の小児腎移植管理を行っており、腎移植の手術前に血液浄化療法を必要とするABO不適合腎移植や、巣状分節性糸球体硬化症など、専門施設での手厚い管理を要する症例に対する腎移植の経験も豊富です。また、合併症を有し、移植の実施が非常に困難な小児に対しても、関連各科と連携し、十分な検討を重ねたうえで腎移植を行っています。
さらに、日々の診療に加えて、小児腎臓病の新たな治療法の開発につながる基礎研究にも積極的に取り組んでいます。今後も、診療と研究の両面から、小児腎臓病医療のさらなる向上を目指してまいります。

血液浄化療法科
Department of Blood Purification

血液浄化療法は、血液中の有害な物質を除去する治療法です。末期腎不全に対して血液透析、血液濾過透析、腹膜透析があり、免疫異常や敗血症などに対して血漿交換や吸着療法などがあります。透析治療ベッド48床、1日2交代と大学病院に付属する透析室としては、国内でも有数です。当科はわが国の透析医療の黎明期から先駆的な役割を担ってきました。そのため、血液浄化療法全般の教育・研修施設としての機能も併せ持っています。透析の診療業績においては、年間外来約9000件、入院約7000件の透析を行っており、新規透析導入は年間約100名、血漿交換や吸着療法などの特殊治療を年間約1000件行っています。さらに、腎臓内科、泌尿器科、腎臓小児科、各科と協力して、保存期慢性腎臓病の診療から、移植、医用工学にもスペクトラムを広げており、視野の広い医師およびメディカルスタッフが集まり、さらにその育成に努めています。私たちはあらゆる血液浄化療法を用いた集学的医療を目指します。

糖尿病・代謝内科
Department of Diabetology and Metabolism

糖尿病・代謝内科では、糖尿病をはじめ、低血糖症、肥満症、脂質異常症などの代謝疾患を幅広く診療しています。国内最大級の診療実績を有する糖尿病外来では、患者さんの病態やライフステージに応じた最適な医療を提供するため、一般糖尿病外来に加え、ヤング・1型糖尿病、二次性糖尿病、インスリンポンプ・CGM、膵・膵島移植、透析予防指導、糖尿病性腎症・透析、神経障害、もの忘れなど、多彩な専門外来を開設しています。インスリンポンプ療法(SAP・AIDを含む)の導入患者数は250人以上、持続血糖測定(CGM)の利用患者数は約1,500人にのぼり、先進的な糖尿病医療を提供しています。また、医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師など多職種が連携したチーム医療を実践しており、日本糖尿病療養指導士(CDEJ)や東京糖尿病療養指導士(東京CDE)などの資格を有するメディカルスタッフが、患者さんのセルフマネジメントを支援し、日々の生活に寄り添った医療を提供しています。2026年には、全国でも先駆けとなる低血糖症専門外来を開設しました。インスリノーマ、インスリン自己免疫症候群(IAS)、非膵島細胞腫瘍性低血糖(NICTH)、反応性低血糖など、専門性の高い低血糖疾患の診断・治療に積極的に取り組むとともに、IASおよびNICTHでは、他施設では実施が難しい特殊検査にも対応しています。肥満症外来では、食事・運動療法を基盤に、最新の薬物療法や多職種による包括的な体重管理を行っています。また、必要に応じて消化器・一般外科と連携し、減量・代謝改善手術にも対応しています。脂質異常症外来では、家族性高コレステロール血症をはじめ、希少な原発性脂質異常症にも対応しています。日本動脈硬化学会専門医を中心に、遺伝学的検査も活用しながら、適切な診断と治療を提供しています。大学病院の糖尿病・代謝内科として、診療・教育・研究を通じて得られた知見を患者さんへ還元し、患者さん一人ひとりの病態に応じた最適な医療を提供できるよう努めています。

高血圧・内分泌内科
Department of Endocrinology and Hypertension

体の恒常性を保つ調節機構(ホルモンを含む液性調節)に注目し、全身の内分泌臓器に関連する疾患の診療を行っています。具体的には、下垂体疾患(先端巨大症やクッシング病、プロラクチノーマ、下垂体機能低下症、中枢性尿崩症等)、甲状腺疾患(バセドウ病、橋本病等)、副甲状腺疾患(副甲状腺機能亢進/低下症等)、副腎疾患(原発性アルドステロン症、クッシング症候群、褐色細胞腫等)、性腺疾患(ターナー症候群、クラインフェルター症候群等)、高血圧、糖尿病、脂質異常症、高尿酸血症、骨粗鬆症、骨軟化症等の患者様が通院されています。
当科には、「内分泌代謝科(内科)専門医」、「甲状腺専門医」、「甲状腺超音波ガイド下穿刺診断専門医」、「糖尿病専門医」、「高血圧専門医」、「動脈硬化専門医」、「腎臓専門医」等を有する優秀なエキスパート医師達が全国から集まり、多種多様なニーズに対応して全身を隅々まで診療しています。
特筆すべき当科のモットーは以下の通りです。
1:症状としての高血圧、糖尿病、脂質異常症を管理するのではなく、原因となる病気、病態を見つけて治します
2:結果としての動脈硬化を評価して、脳卒中や心筋梗塞等から遠ざけます
ホルモンを含む液性調節の異常は、特に複雑な病態を引き起こします。入院においては、前出の優秀なエキスパート医師達がスクラムを組んで、様々な専門医の視点から包括的に病態を捉え、万全な医療を提供しています。
また、当科は全身管理のオーガナイザーとして、関連する循環器内科、心療内科(精神神経科)、腎臓内科、糖尿病・代謝内科、内分泌外科、脳神経内科、脳神経外科等と協力し皆さんの健康長寿を実現することを目標としています

内分泌外科
Department of Endocrine Surgery

内分泌外科は全国的にも稀な診療科です。ホルモンを産生する臓器である甲状腺、副甲状腺、副腎の腫瘍やホルモン過剰症の診断と治療を専門とする内分泌外科のエキスパートがそろっています。内分泌外科指導医+専門医3名、専門医2名の体制で診療しています。甲状腺がんは進行の度合を見極めた上で切除範囲を決めるのが重要ですが、過剰切除にならないように配慮しています。また、原発性副甲状腺機能亢進症に対しては責任病巣を正確に診断し確実に摘出し完治を達成しています。副腎腫瘍に対しては、内分泌外科医で病気を診断し手術まで一貫して行えるのが特徴です。また、遺伝性疾患である多発性内分泌腫瘍症も当科で扱う疾患です。数万人に一人という希少疾患ではありますが、当科では経験豊富なスタッフが揃っていますので適切なアドバイスや治療を提示します。第一に安全、安心な手術を心掛けています。また、手術の体への負担や創に配慮して甲状腺腫瘍の一部と副腎腫瘍は内視鏡手術を行っています。他科(糖尿病代謝内科、高血圧内分泌内科、消化器外科、泌尿器科、脳神経外科など)との連携も重要視しています。

乳腺外科
Department of breast surgery

乳腺外科では乳癌の診断、治療を中心に全人的な医療の提供に努めています。
乳房温存療法では整容性に配慮した乳房温存術（オンコプラスティックサージャリー）を行っています。また乳房切除術が必要な場合は形成外科と連携をとりながら乳房再建術、ご希望のある場合には同時（一次一期）自家組織再建も可能です。
遺伝性乳癌卵巣癌症候群の乳癌患者さんに対しては、ゲノム診療科、婦人科、形成外科との連携のもと、リスク低減のための対側乳房切除術、卵巣卵管切除術を、画像診断学・核医学科との連携でMRIを併用した強化スクリーニングも実施可能です。周術期の化学療法に対しては脱毛予防のための頭皮冷却も行っております。脱毛や爪の変形などに対応するアピアランスケア外来も始めました。挙児希望の方には、婦人科と連携して妊孕性温存のために受精卵凍結や、不安の強い患者さんには乳癌看護認定看護師による身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな多方面からのサポートを提供しています。非手術を希望される方で腫瘍サイズなどの条件を満たす場合には放射線腫瘍科との連携で重粒子線治療という選択枝も可能な場合があります。安全で信頼される乳癌診療の提供を念頭に日々邁進しています。

母子総合医療センター
Maternal and Perinatal Center

母体・胎児医学科
Maternal-Fetal Division

総合周産期母子医療センターの中で、一般産科診療とともにハイリスクの母体・胎児の管理が可能なMFICU（母体・胎児集中治療室）の分野を担当しています。重症例に対しては、関連各科と密接に連携しながら、内科的・外科的合併症を有する妊婦、前置胎盤などの産科合併症、また早産児出生・胎児異常が予想される分娩などあらゆる母体・胎児合併症に対応できる体制がとられています。全ての分娩において高い満足度が得られるよう、助産師を含めたスタッフが一致協力して、診察にあたっています。麻酔科と協力して無痛分娩の要望にもお応えしています。さらに、母乳哺育の推進や育児相談にも積極的に対応しています。

新生児医学科
Neonatal Division

当院は東京都区西部ブロック（新宿区・中野区・杉並区）の総合周産期母子医療センターに指定されており、新生児科はその中でNICU（新生児集中治療室）とGCU（新生児回復室）を運営しています。産科と密接に連携し、地域内外を問わず24時間体制で母体搬送を受け入れ出生した児の治療にあたるほか、地域内外の分娩取り扱い施設からの病的新生児搬送依頼を受け入れ治療を行っています。診療対象はあらゆる新生児疾患であり、在胎22週以降の早産児・低出生体重児・新生児仮死・呼吸障害・低血糖・新生児黄疸・感染症・先天異常など多岐にわたります。小児専門各科との連携により、先天性心疾患・小児外科疾患・脳外科疾患などほとんどの病的新生児への対応が可能です。保育器・生体モニター・人工呼吸器・血液ガス分析装置・超音波・aEEGなど最新の医療機器を備え、低体温療法・一酸化窒素吸入療法・血液濾過透析といった高度専門治療が可能です。その他、合併症のある母体から出生した児のケアや、低リスクの正常新生児のケアも行っています。看護師は家族中心のケアを心がけ、新生児科専属の臨床心理士も在籍し、多職種連携により小さな赤ちゃんが無事に退院の日を迎えられるように全力を尽くしています

呼吸器内科
Department of Medicine

近年の生活環境の変化や人口の高齢化に伴い、呼吸器疾患の患者数は増えています。当科では、気管支喘息、長引く咳（慢性咳嗽）、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、肺がん、肺炎、間質性肺炎、サルコイドーシス、呼吸不全、睡眠時無呼吸症候群など、あらゆる呼吸器疾患の診断、治療を行っています。喘息患者には呼気中一酸化窒素濃度の測定、喘息日誌を用いた管理指導を行い、また、標準治療を行っても改善しない重症喘息に対しては、生物学的製剤の抗IgE抗体、抗IL-5抗体、抗IL-5受容体α抗体、抗IL-4受容体α抗体、抗TSLP抗体を用いた治療を多数行っております。また、エコー下気管支鏡を初期に導入しており、肺がんや間質性肺炎などびまん性肺疾患の診断率が向上し、肺がんに対しては呼吸器外科、放射線科、病理医と包括的診療を行っています。気道の綿毛の検査など、特殊な検査により原発性綿毛機能不全など稀な疾患の診断・治療にも実績があります。呼吸リハビリテーションなどを通じて予防医学・管理医学の充実を図り、在宅酸素療法や在宅医療など、地域医療連携を行っています。当科では、どの曜日に受診されても、各疾患の専門医がいる体制になっているのが特徴です。安心安全の医療を心がけ患者様に適切な治療を提供しています。

呼吸器外科
Department of Thoracic Surgery

肺がん、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸、膿胸、肺嚢胞、漏斗胸などの呼吸器外科的疾患全般について呼吸器内科と連携して手術、診療を行っています。当科では、肺がん、縦隔腫瘍に対する胸腔鏡手術、特にロボット支援下手術を積極的に行っています。当科では2012年よりロボット手術をいち早く導入し、経験を蓄積してきました。ロボット手術が保険収載となった

2018年4月以降、症例数は飛躍的に増加し、全国でトップの施設となっています。そして、手術の質が高く評価され、他施設の医師がロボット手術（国産ロボットも含む）の見学を行う施設として認定されています。従来の開胸術、胸腔鏡下手術も、豊富な経験を生かして行っています。早期肺がんや転移性肺腫瘍に対する肺切除では、個々の症例毎に術前3Dモデルを構築し、ロボット支援胸腔鏡下肺区域切除術ではさらに、遠赤外線を用い、区域間を同定し、安全で正確な手術を行っています。悪性疾患の治療では、患者さんの状態や病状に合わせ、縮小手術を選択する場合もありますが、局所進行病変に対しては、必要に応じて化学療法などを行ったのち手術を施行しています。また、肺がんなど胸部悪性腫瘍には、術後補助化学療法などの集学的治療を積極的に行っています。また、腫瘍による中枢気道狭窄に対しては、硬性・軟性気管支鏡下レーザー焼灼術、ステント挿入を行っています。当院は大学病院という特性上、様々な併存疾患を持つ患者さんが多くいらっしゃいますが、他科との連携を重視し、個々の患者さんに対して治療を安全に提供できる体制を整えています。

膠原病リウマチ内科
Department of Rheumatology

関節リウマチ、全身性エリテマトーデス（SLE）、全身性強皮症、皮膚筋炎／多発性筋炎、混合性結合組織病、血管炎症候群、シェーグレン症候群、抗リン脂質抗体症候群、ベーチェット病、成人発症スチル病、IgG4関連疾患、強直性脊椎炎、乾癬性関節炎、リウマチ性多発筋痛症など、あらゆる膠原病～類縁疾患、リウマチ性疾患の診断と治療を行います。早期診断・早期治療を心がけており、診断の確定していない、未治療の患者さんも積極的に受け入れています。薬物治療としては、個々の患者さんに最適な分子標的治療を、副作用や合併症に注意しながら使います。難治な患者さんには開発中の新規薬剤の治験をご紹介させていただくこともあります。外来診療を基本としつつ、重篤な患者さんや肺炎などの合併症は入院診療で対応します。関節外科手術が必要な患者さんは整形外科（リウマチ）と連携し、成人期医療への移行が必要な患者さんは小児リウマチ科と協働し、国内外で類を見ないリウマチ性疾患の総合的な診療を同一病院内で展開しています。

整形外科（リウマチ）
Department of Orthopedic Surgery

整形外科（リウマチ）は整形外科リウマチ班の外来部門です。整形外科（リウマチ）では国内最大規模となる毎年約300例のリウマチ性疾患の関節外科手術を行っており、リウマチ性疾患により侵されるほとんどの関節を治療対象としています。以前から膝や股関節の人工関節を積極的に行っていますが、近年は特に足趾や手指といった小関節の手術が増えています。足の外科では最近の関節リウマチ治療の成績向上に合わせ、関節修復まで考慮した手術方法を採用しています。また患者さんのニーズを踏まえ、全国的にはまだ数少ない人工足関節置換術も積極的に行っています。手の外科では人工指節関節手術や人工肘関節手術などに積極的に取り組んでいます。薬物療法で免疫抑制剤やステロイドなどを使用する患者さんにも、豊富な経験をもとに安全な治療を行っています。

小児リウマチ科
Department of Pediatric Rheumatology

成人で発症するリウマチ性疾患（膠原病）の多くを小児も発症します。同じ病名でも成人とは病態が異なる場合があり、病名に“若年性”とつけられるものがあります。症状や治療の選択、今後の経過などが成人とは異なり、成長期ならではの配慮が必要となります。
小児リウマチ科では小児リウマチ性疾患・自己免疫性疾患（若年性特発性関節炎（JIA）、全身性エリテマトーデス（SLE）、若年性皮膚筋炎（JDM）、混合性結合組織病（MCTD）、ベーチェット病、シェーグレン症候群、抗リン脂質抗体症候群）、血管炎症候群（高安動脈炎、結節性多発動脈炎など）に加えて家族性地中海熱、クリオピリン関連周期熱症候群（CAPS）、TNF受容体関連周期性症候群（TRAPS）などの自己炎症疾患・周期性発熱症候群の診断と先進的な治療を展開しています。当施設ならではの成人科と一貫した体制下で、成人期に向けた移行支援にも取り組んでいます。
外来診療は小児科ではなく、リウマチ科でおこなっています。

ゲノム診療科
Institute of Medical Genetics

病院内の多くの診療科は対象となる臓器別に専門分野が分かれていますが、当科が対象とするのは、染色体や遺伝子、DNAなどを含むゲノムです。ゲノムが原因で発症する全ての疾患を対象としています。この20年余りで遺伝学的解析技術が飛躍的に進歩し、新たな遺伝学的疾患が多数発見されてきました。ゲノム検査の結果がもたらす特徴として、①生涯変化しないこと、②遺伝形式によっては血縁者と共有している可能性があること、③結果を用いて将来を予見することができること、などがあり、検査を受ける前にメリットとデメリットをよく理解し、ご自身で判断していただくことが重要です。そのためにわれわれが提供するのが遺伝カウンセリングです。出生前・着床前診断にも応用される可能性のある検査になりますので、当事者の方々に対する生命倫理的な配慮も行いながら、心理・社会的サポートを行っています。また、先天性疾患の治療法開発にもつながるような研究にも取り組んでいます。

女性センター
Women's Center

女性センターは、女性特有の器官や疾患、女性医師を希望する患者さん（女性）の診療を行う部門として平成30年5月に開設されました。いろいろな診療科の女性教授を主体としたスペシャリストの女性医師、メディカルスタッフにより、専門性の高い懇切丁寧な診療を行っています。乳がんの早期診断、治療、化学療法、緩和ケアをはじめとする乳腺疾患の診療、大腸がん及びその他の大腸・肛門疾患の診断、大腸内視鏡検査、シミ・いぼなどの美容治療、内科系疾患（ホルモン異常、呼吸器疾患、糖尿病、肥満症、脂質異常症、心臓病、認知症、頭痛、てんかん）、小児リウマチ性疾患、自己炎症疾患、働く女性の健康管理などの診察、遺伝学的検査の相談などを行っています。関連する各科と連携し、本学ならではの高度で心のこもった女性医療を推進しています。

救命救急センター
Critical Care and Emergency Medical Center

当センターは、厚生労働省の指定を受けた三次救命救急センターとして、重篤な救急患者さまを24時間365日体制で受け入れています。東京消防庁をはじめ、近隣県の消防機関や他医療機関から搬送される患者さまに対し、病気やけがの種類を問わず、常に迅速かつ的確な対応を行っております。主な対象は、心肺停止や多発外傷、重度のショック、多臓器不全、脳卒中など、生命に関わる緊急状態の患者さまです。当院は、高度な医療機器と各専門診療科が充実しており、救急科や集中治療科、外科、脳神経外科、整形外科などの医師が緊密に連携し、どのような急変にも対応できる体制を整えています。また、臨床工学技士や臨床検査技師などの専門スタッフも常駐し、急性血液浄化療法や体外循環（ECMO）、脳低温療法、高気圧酸素治療など、最先端の集中治療を提供しています。これにより、重症患者さまの救命だけでなく、その後の回復や社会復帰までを見据えた支援が可能となっています。ICU（集中治療室）での治療後には、専用の一般病床に移行し、継続的な治療・ケアを行うことで、一貫した医療を提供しています。さらに当センターは、災害派遣医療チーム（DMAT）にも所属しており、大規模災害や事故時にも地域医療の要として機能します。今後も、地域の皆さまに信頼される救命救急センターとして、安全・安心な医療を提供し続けてまいります。

がんセンター
Cancer Center

がんは2人に1人が罹る身近な病気になりましたが、多くの方が病名を告げられるとショックを受け、治療過程においても悩み揺れ動く気持ちを体験します。がんセンターでは、医師をはじめ看護師、薬剤師、放射線技師、管理栄養士、臨床心理士、理学療法士、ソーシャルワーカー等、多職種で活動しております。診療科単位にこだわらず、横断的な組織として当センターの基本理念である「至誠と愛に基づく全人的ながん医療」の提供に努めております。医療の進歩から治療も多様化しており、がん診療に携わる医師だけではなく、メディカルスタッフも参加する「キャンサーボード」では、患者さんの思いや意向を大切にしながら、患者さん一人一人に寄り添った治療やケアについて検討をしています。また、緩和ケアチームによる専門的な緩和ケアの提供や、がん相談支援センターでは心や生活についての相談をお受けしている他、患者さん同士の語らいの場として「カフェすまいる」を開催しております。がんゲノム診療室では、他診療科、他医療施設と連携を図り、患者さん一人一人に合わせた治療のサポートを行います。また、小児がん支援室では、患者さんとそのご家族に、安心して医療が受けられるよう体制を整えております。がんセンターでは、がんと診断されたときから患者さんやご家族が、少しでも安心して治療やケアが受けられるような体制づくりを目指しております。

アレルギー総合医療センター
Allergy Medical Center

2019年2月に東京都のアレルギー専門病院に指定され、2020年2月にアレルギー総合医療センターが設立されました。アレルギー性鼻炎、花粉症、咳喘息、喘息、蕁麻疹、アトピー性皮膚炎、薬剤アレルギー、食物アレルギーの診断、治療を行います。アレルギー疾患は、内科、小児科、皮膚科、耳鼻咽喉科など多岐にわたるため、当センターでは、各科アレルギー専門医が協力して診察にあたり、横断的に診断や治療をしてまいります。アレルギーの診断に最も重要な免疫グロブリンIgEは、1966年に石坂公成、照子（女子医専の卒業生）夫妻により発見され、現在では、抗IgE抗体が慢性蕁麻疹や重症喘息の治療にも貢献しています。この抗IgE抗体を含め、生物学的製剤の加療を行っている患者さんは100例以上に及びます。また、アレルギー専門医、医療スタッフの育成、入院患者への高度な治療・教育の提供を行っております。アレルギー疾患の患者数は増加しており、医療現場のみならず学校や職場などでも対応や対策が重要視されています。最新の知識と技術を持った医師が対応し、安心、安全で、適切な診療を提供しています。

研究推進センター
Tokyo Medical Innovation hub (TMIh)

本院における臨床研究(特に治験)を円滑かつ迅速に推進し、世界水準の研究を実施するための支援・管理を行うことを目的として研究推進部門「Tokyo Medical Innovation hub (TMIh)」は再編・設置されました。
当部門の配下には「治験管理室」「試験薬管理室」「バイオバンク・トランスレーショナル・臨床研究情報データ管理室」「トライアルユニット室」の4つの室があります。
新しい治療法や薬が開発される際には、それがどのような病状の患者さんにどの程度役立つか、また、安全性に問題はないかなどを患者さんにご協力いただきながら確かめる「臨床研究」が行われます。その中でも新薬や新しい医療機器の製造承認を得るために行う試験のことを「治験」といいます。臨床研究は人を対象とするため、法律や基準によって患者さんの人権保護や記録などの保存が厳格に定められおり、治験審査委員会や各種倫理委員会の承認を経て実施されています。
当部門では、臨床研究(治験)に参加してくださる患者さんの権利と安全性を最優先に考え、日々の研究支援・管理体制を整えています。治療法がなく困っておられる患者さんへ、少しでも早く優れた治療法をお届けできるよう、全スタッフが一丸となって日々努めております







看護部
Department of Nursing

看護部では、「看護の挑戦、看護の将来ビジョン~いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護~」を基に患者さん、ご家族に看護の提供をしています。外来では、受診される患者さんご家族の受診目的が達成され、疾病とともにその人にあった生活ができるような支援やケアを提供しています。また、患者さんが検査、治療など理解できるように意思決定支援に努めています。入院病棟では、24時間365日最も身近な存在として、安全で安心できるような看護体制で対応しています。また、入退院支援センターを通じて外来と病棟の看護師が連携して入院前から退院後の患者さんとご家族の生活を見据え、「生きるを、ともに、つくる」ために地域を含む多職種と連携し、継続した看護ケアを行っています。限られた入院期間の中で、迅速に患者さん、ご家族のニーズを把握し、意思決定支援を行い、安心して地域に戻り生活できるように支援しています。さらに、看護の専門性を発揮できる専門看護師、認定看護師、診療看護師、エキスパートナースなど看護のスペシャリストをキーパーソンとして、患者さんとご家族にとって最善の医療、良質で安全な看護ができるように努めています。

薬剤部
Department of Pharmacy

薬剤部は、安全で質の高い薬物治療を提供できるようにさまざまな薬剤業務に取り組んでいます。特に外来では、入院する前に持ち込む持参薬を確認し安全に使えるように関わり、また、すべての病棟に薬剤師を配置し、入院時、入院中、退院時と関わり、適切な薬物治療が行えるように医師や看護師などと常に相談し薬物治療管理を行っています。薬剤部内の部門は、主に内服外用剤を調剤する調剤室、注射薬を調剤する物流管理室、抗がん剤などの注射剤を無菌的に調製混合する注射調製室、市販されていない特別な薬剤の調製を行う製剤室などの中央業務と、入院患者さんへの薬の説明や薬の適正使用を総合的に管理する臨床薬剤管理室に分かれています。また、感染、がん、緩和、栄養などの専門領域のチーム活動に参画しており、各部門が病院内の他の診療部門と連携を図ると共に、薬剤師が患者さんの身近な距離にいることで、日々患者さんの薬物治療の安全確保と最適化に努めています。

中央放射線部
Department of Radiological Services

中央放射線部は、高度な画像診断と放射線治療を行うために、多くの大型放射線関連機器を揃えた我が国有数の放射線診療部門です。
現在、画像診断のための関連機器は、320列、256列MDCTを含む7台のCT 装置、MRI 装置は3T を含む7台、PET/CT、SPECT/CT・SPECT 合計４台、心臓カテーテルなどの経皮的に診断・治療を行う血管撮影装置は8台、他には乳がんの早期発見のためにトモシンセシスとステレオガイド下生検を搭載した乳腺撮影装置が稼働しています。放射線治療については、高精度の強度変調放射線治療が可能なCT 搭載のリニアックなど2台、腔内照射装置とガンマナイフ、8台を超える放射線治療計画装置が活躍しています。また2024年の病院機能評価ではS評価を取得しています。近年急速に進歩する画像診断技術や放射線治療技術をいち早く取り入れて日常の先端医療に結びつけていくためには、中央放射線部の画像診断・放射線治療の専門医、診療放射線技師、医学物理士、専門看護師だけにとどまらず、各部門との連携が何より重要です。あらゆる専門性を取り入れた“協同によるチーム医療”をモットーに、中央放射線部の診療体制を更に整えてまいります

中央検査部
Department of Central Clinical Laboratory

中央検査部は心機能検査、超音波検査、脳波・節電図検査、呼吸機能検査および内視鏡検査などを行う生理検査部門と血液、尿などの体液や分泌物に含まれる生化学的成分、免疫血清学的成分および微生物、血液細胞、尿中細胞などの形態学的検査を行う検体検査部門及び採血部門で構成されています。当部は総合外来センターに位置し、患者さんが安心して検査を受けられるよう患者サービスに努めるとともに、各検査分野での認定資格の取得等に力を入れて専門性の高い技師育成に努め、より質の高い検査データの提供を行っています。さらに、検体検査においては診療前検査における検査項目を充実させ、迅速な検査結果の返信により、診療部門の診断・治療を遅延なく行うための重要な役割を担っております。検体検査室および生理検査室は、国際標準化機構の国際規格ISO15189を取得しています。

輸血・細胞プロセシング部
Department of Transfusion Medicine and Cell Processing

大量出血を伴う手術、がんに対する化学療法、重症外傷などの治療には、輸血療法が不可欠です。一方で、献血由来の他人の血液を使用する輸血療法には、感染症や免疫反応などの副反応が生じる可能性があるため、安全かつ適正な使用が求められています。
当部では、献血から製造された血液製剤を日本赤十字社血液センターから取り寄せ、適切に管理するとともに、血液型検査や交差適合試験などの輸血検査を実施し、手術室・ICU・病棟・外来へ供給しています。また、アルブミンや免疫グロブリンなどの血漿分画製剤の管理・供給も行い、特定生物由来製品（ヒトや動物の組織・血液などから作られる医薬品等）全般について、適正使用の推進と医療安全の確保に取り組んでいます。
採血室では、手術に備えて患者さんご自身の血液をあらかじめ採取・保存する自己血採血を実施しています。また、血液がんに対する造血幹細胞移植や免疫細胞療法に必要な成分採血（必要な細胞成分のみを採取する方法）を行っており、一部は細胞プロセシングセンター（CPC）で細胞の調製や活性化培養などを実施しています。
さらに、出血量の軽減を目的としたクリオプレシピテート製剤

の院内調製や、難治性腹水に対する腹水濾過濃縮再静注法(CART)の処理などを通じて診療を支援しています。加えて、先天性溶血性貧血や赤芽球癆などの難治性・稀少血液疾患の診断に必要な特殊検査も実施しています。

臨床工学部
Department of Clinical Engineering

高度な医療を提供する当院は、多くの医療機器を使用しています。医療機器には、輸液ポンプ、シリンジポンプ、心電図モニタなどの多くの患者さんに使用される装置、ペースメーカー、人工呼吸器、透析装置、人工心肺装置、補助人工心臓、ECMO(体外式膜型人工肺)などの生命維持装置、そして電気メスからDa Vinci(医療ロボット)まで高度な手術支援機器など多岐にわたっています。臨床工学部は、それらの医療機器を患者さんがいつでも安全に安心して使用されるように、日頃から保守点検を行うとともに、医師、看護師などの多職種と連携し、チームの一員としてそれらを操作する業務を担っています。現在、45名の臨床工学技士が在籍し、手術室、集中治療室、心臓カテーテル室、透析室、ME機器管理室などの領域で高度な診療支援を行なっています。

栄養管理部
Nutrition Support Unit

栄養管理部では、安全安心で病態・症状に応じた美味しいお食事の提供を心がけています。
入院中のお食事が楽しい時間になるよう、行事食なども積極的に行っております。
栄養は治療の土台にもなるため、管理栄養士は、チーム医療の一員として、入院前から医師や看護師、メディカルスタッフなど多職種と連携し栄養スクリーニングを行い、患者個々に栄養計画を立てニーズにあった栄養管理を実施しております。
また、疾患と食習慣の関わりは強いものが多く、適正な食事療法を修得できるように栄養指導を行っております。
『食べること』を大切に考え、適切な栄養管理を支援すべく、日々、新しい専門知識の習得に務めています。

医療連携・入退院支援部
Social Support Department

地域連携室
当院と地域の医療機関やかかりつけ医の先生方との連携窓口として、外来診療やセカンドオピニオン外来の予約、診療情報提供書などの発送業務を担当しています。また、連携登録医の先生方の連絡窓口及び情報発信を行っています。

入退院支援室
外来・入院の患者さんが病気や障害があっても「自分らしい」望む生活を送れるように、専任の看護師が相談窓口としてサポートします。 院内外の医師、看護師、ケアマネジャーなどの医療介護福祉関係者と連携し、入院前から退院後の生活まで、切れ目のない安心をお届けします。

医療福祉相談室
傷病によって生じる社会生活上の様々な問題に対し、ソーシャルワーカーがご相談をお受けしています。社会保障制度や地域のサービスを紹介し、地域関係機関と連携を行いながら、患者さんやご家族にとって安心できる療養環境や社会生活が送れるよう不安や心配ごとなどを共に考えサポートいたします。

ベッドコントロール室
ベッドコントロール室では、病床を効果的に運用するために管理と調整を行っています。予定入院だけでなく、緊急入院や転院を必要とする患者さんの受け入れを速やかに進めています。ベッドを効率よく稼働できるように、入退院情報を把握します。また、出来るだけ患者さんのご希望に添えるように差額ベッドの調整をしています。

クリニカルパス推進室
クリニカルパスを活用し、チーム医療の推進を行い良質で標準的な医療の提供に取り組んでいます。また、患者さんやご家族のために、検査や治療の入院経過が分かりやすいよう患者用パスの作成および病院ホームページへの掲載を支援しています。各診療科と連携し、患者さんやご家族と臨床現場の支援を行っています。





医療安全推進部
Department of Patient Safety Management

医療安全推進部門は2017年９月に役割・機能を拡充させるために、「医療安全対策室」から「医療安全推進部」に昇格しました。また、「安全対策」からもう一歩進めて「安全推進」という取り組みを強化するために、名称も現在のように「推進部」へ変更しております。当院は、医療安全に関する大きな課題を背負っており、他の病院より一段も二段も高いレベルでの取り組みが求められています。そのため、2016年には「医療安全科」を新たに創設し医療安全を担当する専従医師を確保し、また専従の薬剤師も配置して、多職種で構成される部門として機能強化を図っています。現在では、医師２名、薬剤師１名、看護師３名、臨床工学技士１名、事務職員３名の計10名の専従職員で構成されています。
インシデント・アクシデント報告システムにより、再発防止策を検討・実施と共に、チーム医療の推進に向けた研修会などを企画し、院内各部署の協力を得て「安全文化の醸成」に努めています。また、当院ではハイリスク症例、高難度新規医療技術症例などが多く、手術や治療に対して患者に関わる職種の専門家が一堂に会し検討を行い、医療安全に力を注いでいます。2019年12月からは、「医療対話推進室」も併設し、患者・家族との信頼関係を基盤として安全・安心な医療の提供を支援できる体制にしております。

総合感染症・感染制御部
Department of General infectious Diseases Infection Control

総合感染症・感染制御部は、感染症診療と院内感染対策を担い、患者さんが安全な環境で安心して治療に専念できるようサポートする専門部署です。病院長直轄のもと、感染症専門医や感染管理認定看護師、薬剤師、臨床検査技師等で構成される感染対策チーム(ICT)と、感染対策リンクドクター・リンクナースが、職種を超えて連携しながら日々の感染対策に取り組んでいます。当部門では、感染症に対する抗菌薬が適切に使用されるよう専門チーム(AST)が確認し、感染症の早期改善と薬剤耐性菌の発生防止に努めています。また、手指衛生や環境整備など、科学的根拠に基づいた院内感染対策を推進するとともに、感染状況の監視(サーベイランス)や職員への教育・指導を継続的に行っています。
病院全体で患者さんが安全で質の高い医療を受けられる環境づくりに努めています。

からだ情報館
Patient's Library

「からだ情報館」は、病気や治療に関する様々な情報を調べることができる場所です。医学書やパンフレット、検索用パソコンをご用意しております。また、併設する“がんサロンすまいる”では、がんの治療やそれに伴う暮らしに関連する情報をお知らせしています。

医療の質向上推進部
Department of Healthcare Quality Improvement

医療の質向上推進部は、患者さんが安心して質の高い医療を受けられるよう、病院全体の医療やサービスの質を継続的に向上させるための改善活動を行う部署です。
当部では、病院全体で医療やサービスの質を高めるための活動である「TQM(トータル クオリティ マネジメント)」を推進しています。医療の質指標(QI:クオリティ インディケーター)を活用して医療やサービスの質を評価・分析し、その結果をもとに、データに基づいた改善活動に取り組んでいます。また、患者満足度調査の結果を分析し、患者さんからいただいたご意見を医療やサービスの改善につなげています。
さらに、第三者機関による病院機能評価への対応や、院内ラウンドによる医療安全・療養環境の確認、全職員を対象とした救命講習(BLS)の運営支援などを通じて、安全で質の高い医療を提供できる体制づくりに努めています

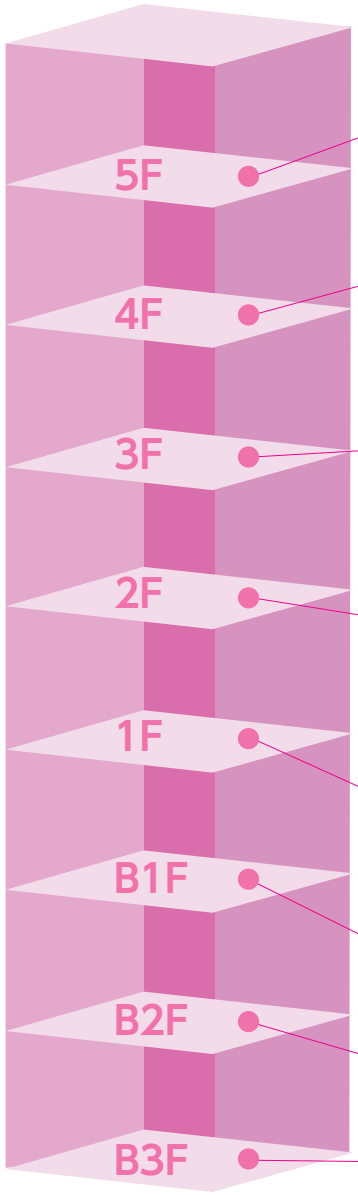
臨床倫理部
Department of Clinical Ethics

臨床倫理部は、日々の診療の中で生じるさまざまな倫理的課題に病院全体として適切に対応するため、2025年度に設置された部門です。臨床倫理委員会、臨床倫理コンサルテーションチーム(ECT)、身体拘束最小化チームを包括し、横断的に連携をとりながら、院内の倫理的課題に対する窓口の役割を担っています。ECTでは治療方針をめぐり判断に迷う事例について、多職種チームが相談を受け、検討を行い現場に助言を行っています。また、身体拘束最小化チームではラウンドを行い、身体拘束の最小化に向けた活動を行っています。そのほか、職員への倫理教育、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)の普及などを通じて、患者さんの意思と尊厳を尊重した医療の実現に取り組んでいます。



外来案内 令和8年10月現在

総合外来センター



- 特別診察室
- トータルヘルスケア・予防医学センター

- 産婦人科
- 母子総合医療センター
- 高血圧・内分泌内科
- 内分泌外科
- 乳腺外科
- 女性科
- 血液内科
- 麻酔科
- 放射線腫瘍科
- 耳鼻咽喉科
- 歯科口腔外科
- 皮膚科
- 睡眠科

- 腎臓内科
- 泌尿器科
- 腎臓小児科
- 血液浄化療法科
- 糖尿病・代謝内科
- 眼科
- 形成外科
- 画像診断・核医学科
- レストラン
- ゲノム診療科

- 消化器内科
- 消化器・一般外科
- 消化器内視鏡科
- 循環器内科
- 心臓血管外科
- 循環器小児・成人先天性心疾患科
- 脳神経内科
- 脳神経外科
- 呼吸器内科
- 呼吸器外科
- ゲノム診療科

- 総合診療科
- 小児外科
- 整形外科
- 小児科
- ペインクリニック
- 会計
- 膠原病リウマチ内科
- 整形外科(リウマチ)
- 小児リウマチ科
- からだ情報館
- 総合受付
- 入退院支援センター
- 売店

- 核医学・PET 検査室
- 放射線検査室
- 検体検査室

- 医療記録管理室

- 放射線治療室

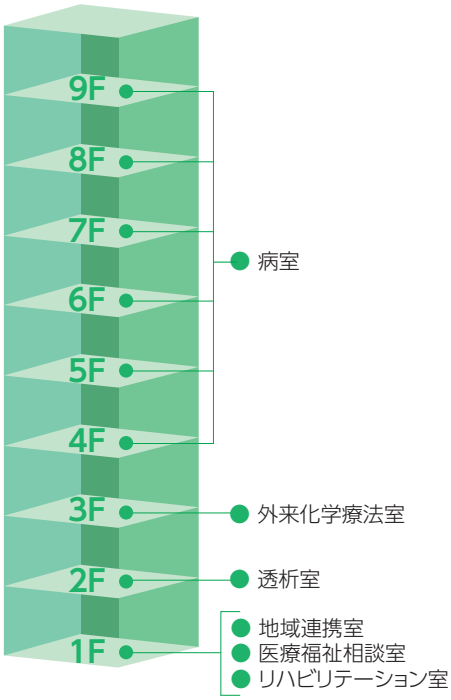




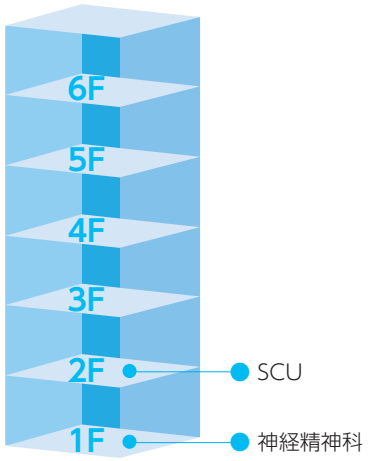


病棟案内　令和8年10月現在

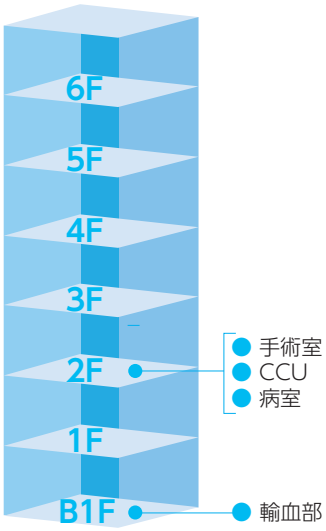
第1病棟



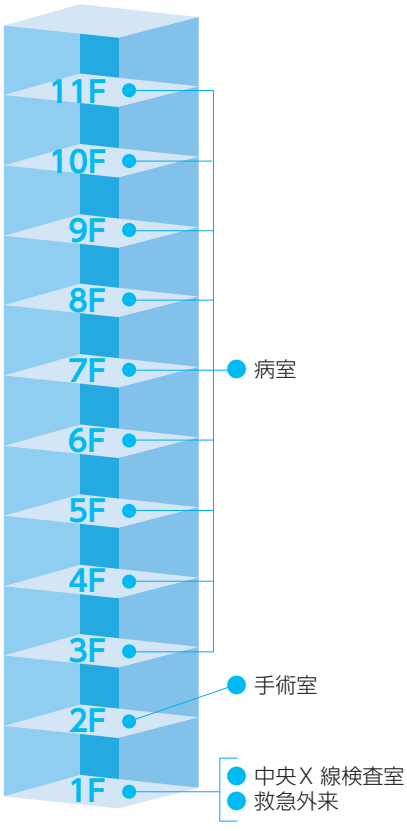
西病棟A



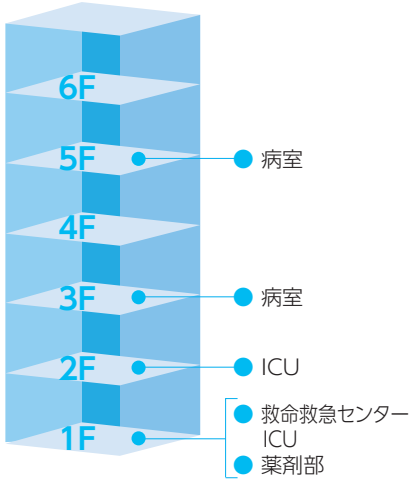
西病棟B



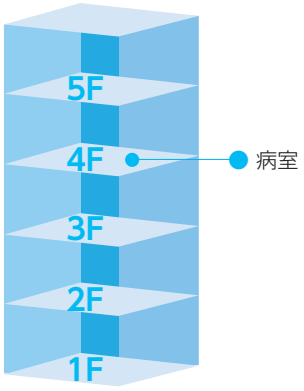
中央病棟



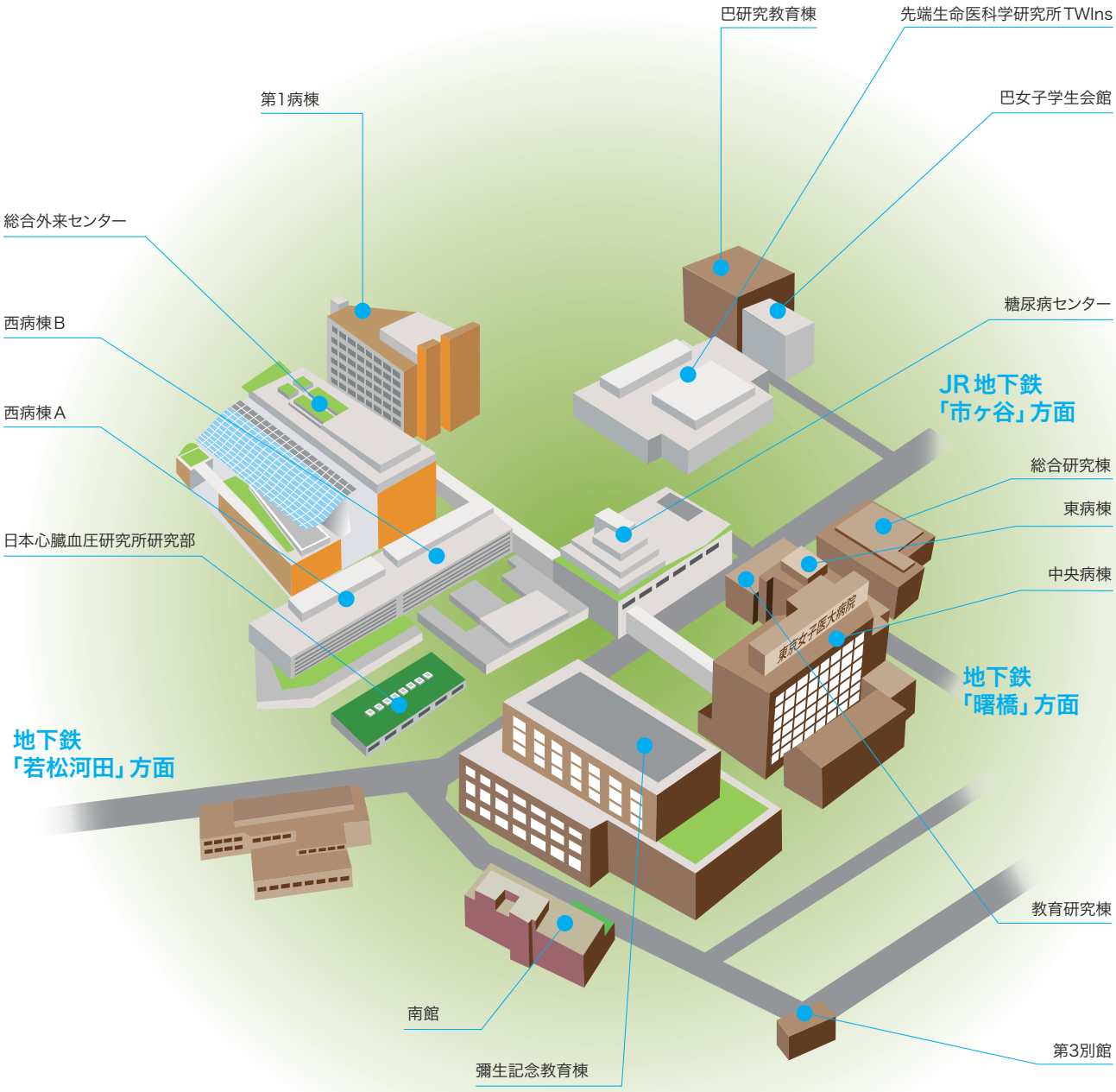
東病棟



糖尿病センター



構内見取図



東京女子医科大学附属施設

●附属足立医療センター
〒123-8558 足立区江北4-33-1
Tel:03-3857-0111

●附属八千代医療センター
〒276-8524 千葉県八千代市
大和田新田477-96
Tel:047-450-6000

●附属東洋医学研究所
〒162-8666 新宿区河田町8-1
南館1階
Tel:03-6709-9021

ご案内図



◎地下鉄

都営大江戸線　❷若松河田駅下車（若松口より徒歩約5分）
❸牛込柳町駅下車（西口より徒歩約8分）

都営新宿線　❹曙橋駅下車（A2出口より徒歩約8分）

◎都営バス

宿74系統　❶新宿駅西口→東京女子医大前

宿75系統　❶新宿駅西口→東京女子医大前←❽四谷駅前←三宅坂

早81系統　早大正門→❺馬場下町（早稲田駅）→東京女子医大前←❻四谷三丁目←千駄ヶ谷駅前←原宿駅前←渋谷駅東口

高71系統　❼高田馬場駅前→東京女子医大前←❾市ヶ谷駅前←九段下

東京女子医科大学病院

〒162-8666 東京都新宿区河田町8-1　Tel：03-3353-8111（代表）